神なる哉、和漢古今一人にて、産科の醫聖と謂ふへし、予弱冠より家世の産術を統へ、是を行ひ、未三隅に不及時、賀川流の術皆傳す、周の諺曰山有木工度之、余も亦如此、産孕あれば彼れに施し、是を試み、玉に比すれは和氏玉璞にして天下無二也、雖然、予四十餘年經驗の眼目を琢磨し、恐らくは寸瑕あることを看破す、且囘生鈎胞にも迂遠なり、又闕たることあり、今予か取用ゆる所のものは、通計二十術及囘生鈎胞の諸術にて、漸三四術に限る、其他の術數成捷徑なるものを自得して、一證一術とす、故に業を受る者、學ひ易く、又行ふに便利也、愚意ふに、賀川氏は海内より門人を來さんと欲して琢磨せす、早く世に公けにするの致す所にや、具に是を論すれは、第一辨胎の係下は、姙か否を辨するのみ、夫病の塊物を見て是姙也と疑惑して、母の命を殞すことあり、或は胎を血塊なと云て、兒を害ふことあり、世間此例多し、故辨胎は産科の專務たり、然るに是を不論は、其瑕一也、子癇の者、或は姙娠小便快利せす、段々腹大滿、一身水腫、起臥不安者、或は惡阻難治日を經て虛憊の者、或は臨産槳水不下、分娩日數を經る者、此等の症に至ては、催生術に非れは、其効神速なることはなし、然るに、此術を闕く其瑕二也、鉛刀の多きを用んより、寧莫耶の一刀を遣へは便利なること必然たり、然るを二三術、或は五六術、彼れを試み、是を施し、卽莽か令を學に齊し、似巧非巧、反て惑來學又煩患者其瑕三也、胎の形は月々の寸法に定り有もの也、是不知半産と云者に、いかにも滿月の産有ことあり、其時に臨て、俗間と雷同し、或は娩期の日限大率にも不知は、産科醫とはいひ難し、何そ是を不辨其瑕四也、産論に鬼胎血塊臍下の左或は章門の邊にあり、形娠の六七月に類すとあり、是は何か、婦人科の書中より見出し、其儘にて書たると見ゆ、甚す外の說にして、産科醫の言に非らす、たゞ無益のみならず、却て初學者を惑す、其瑕五也、産論翼に子癇の者、子宮自ら開くことあり、囘生術を以て取へしとあり、迂遠とも、又愚なりとも謂ふへし、其瑕六也、整胎術は、六月以下と、七月以上は二術にあらされは不可也、然るを兒の参差に不拘、一術を以てするは何ぞや、其瑕七也、産前後の小便閉は、余は一術を以て速に通せしむ、然るを輕術より段々重術に至迄は、五術を施す、是後學者を惑

す、又病婦を煩す、其瑕九也、坐草の術は、分娩を進ませるの術也、予便利なる一術を施すに甚効あり、然るを六術を著し、後進の者を惑す、其瑕九也、胎の死活を辨するは産科の專用たり、予一術を以て是を辨す、然るを産論翼に死胎候法二十五條とす、茫々として初學是に惑ふ、其瑕十也、其佗尺も短きことあり、寸も長きことあり、各條の下に悉く是を論す、是余か巧なるに因て發明するに非す、前漢書に曰、蓋有因而成易、無因而成難、故因舊書以序數術矣、誠に此之謂也、予賀川家の法を以規矩となし、以方圓を作すと云もの也、雖爾後漢書曰、醫之爲言也意也、腠理至微、隨氣用巧、針石之間、毫芒卽乖、神存於心手際矣、意は志也、思也、故に古語に曰、業精于勤行成于思矣、兎角意を盡し、孳々と努め考按すれば、下學して上達する事、醫術のみに限らす、萬學皆然り、朱子曰、藝は好む所に在りと、予産術を好み、精心覃思す、故に琢磨ならさる事なし、補理ならざる事なしと雖、爾予か一人の功には非ず、二先生は和氏也、余は玉工也、今琢磨し、且補理して、連城となし、天下の大寶とせんと欲す、盖し産孕の苦辛勞艱は、上天子より下庶人に至るまで繩々としてたゆる事なし、古語曰、不知而不言愚也、知而不言不忠也矣、予其不忠たる事を恐れ、因て賀川家の鴻澤を不顧、褒貶して此書を編めり、豈救濟に於ては、而り予か右に出る者なし、獨近邑に産婆あり、此人の春秋をいへば、予には母也、故に術行も亦先輩也、同氣相求、同聲相應すと云者にて、産婆を好み、又輕々しく出行する者を貴ふは、俗習の常也、故に東西南北、遠近となく稱せらる、其鳴ること甚し、予竊に以爲曰、三人行則必有我師又下問を恥ぢずと云こともあれは、彼人の發明することを聞まほしく、寸志を携、一日彼宅へ往き、終日茶談す、予懇問するか故に、彼も亦肺肝を吐露す、其言を聞くに、舟車馬牛各用ゆる處有か如く、予か發明する所に符合することあり、君子不以人廢言、雖出揚墨之口、若其言之善者、則猶可取焉耳、今其善を撰び、此著を訂竊す、雖然、高名の君子、若し此書の非妄を看破せは、予か大幸也、子路か如く、其人を拜せん、且束脩して敎を請ん、旣に堯舜禹湯各自臣を以て輔と稱し、或は親友或は丞、或は佐と稱し、問學の羞愧せず、道德成就して、功名萬世に揚ぐ、聖天子すら如此、所謂千金の裘は、非一狐之

賺況凡下剪劣の者に於てをや、賀川家の説と優劣を折衷し見と欲し、兩書照見せば、其是非の分ること、猶明鏡を懸て妍醜を見るか如くならん、然して、後東脩して門に入、諸術皆傳すれは、損益の差、權衡を以軽重を知か如く、判然と分也、雖門人産孕に遇ふことに、深切に工夫を凝さは、余に賢れることもあらん、故に古語に曰、弟子不必不如師、師不必賢於弟子矣、後生可恐、と孔子もいひ玉はすや、子玄先生は初砭針按摩を以て業とし、一日隣婦人の厚危を救ひ、悟る處あつて終に産科の一家を立、名を海内に發す、刱捷徑の術相傳に於ては良豎とも成へけん、書不盡言、言不盡意矣、雖然、盡し易きもあり、其易きものは書し、難きものは面誨す、其目數を擧されは規則不定也、敎の漏る事あり、敎の漏ることあれば、一盲衆盲を引に異ならず、又死生輕重の證候不知は、治術進退の齟齬あることあり、故に其大率を巻中に附錄す、初學のため、都て俚言を以捷徑便利を書し、命じて産科捷徑策と云、因て其不言の不忠を免んと欲する而已、

文政八乙酉春三月　常州土浦　坂本宗文顯純　著

以上は、近世期に於ける女科醫として、いづれも一家の見識を立て、斯界に貢献し、多大の業蹟を遺したる人なりとす。

第二十八章　女科書と産科器具

最古の醫心方出でしより以來、婦人方のみを以て、刊行せられたる醫書なかりしが、寛文八年、中條流産科全書出版せられ、之に次いで瀬之尾流産前後方、及び半井家産前産後秘書出で、元祿三年、稻生正治はその主宮津候永井右近太夫の世子の爲、螽斯草を著して胎養法を解けり。此の書の題命たるや、支那の螽斯篇に據りたるものにして、頗る雅馴なる題名たり。

元祿五年、中津の醫師香月牛山は、婦人壽草を公にしたり。固これ、支那に於ける女科書の拔萃なりと雖、通俗的婦人衛生書たるを

失はず。然るに斯界の開山とも稱すべき賀川玄悅、世に現はれて産論を著はすや、曙光東嶺に見え、嗣子玄廸産論翼を著はし、更に師說を敷衍するに及び、太陽中天に輝き、色彩文目始めて明亮たるの有様なりき。

されば、この二書の世に推重せられ、斯界に貢献せしこと多大なりき。蛭田克明の田子産則全書、賀川滿卿の産道口訣、幷に手術解、産道秘書、産術記出で、佐々井玄敬の産家やしなひ草、片倉元周の産科發蒙、並に蛭田門の手に成りし産科新編、産科手引草あり。その他、最も通俗的の著書としては、産科やしなひ草の外に、保産道志類邊、安産道志類邊等あり。獨、産科發蒙に至りては、始めて泰西の産科書に依り、蘭醫ファン、デヴェンテルの著書なる二十七の胎位圖、英醫書中の二箇の鉗子使用圖等を紹介し、我邦學術界に一進步を與へたり。

或は、原昌克の叢桂偶記、及び醫事小言、賀川滿定の口授にかゝる産科秘要、奥道逸の未定稿なる産論校註、女科隨劄、女科漫筆、並に婦人大全良方、保産心得の校本と、門人の筆記せる達生園産科外術秘錄、産科內術、及び門人緒方維勝の編輯せし、劣齋先生産科圖說は、益々斯道の研礸を證するに足るべき著述にして、山邊文伯の産育編には、英人の産科書より匙狀鉗子圖を拔萃せり。

救偏産言は、富士谷成基の著にして、産論、及び産論翼の補遺と云ふべし。産航は、桑原惟親の著にして、輕佚二冊あり、文化十年の刊行にかゝる。産科議要は、馬屋原玄說と共に、賀川蘭齋の說を筆記したるものなり。

産科捷徑策一冊は、産論、産論翼、産科發蒙等の補遺にして、坂本宗文の撰する所、翌年産科辨妄を著し、立野龍貞の産科新編を駁擊す。此に於いて、斯界彌々色めくに至れり。

南陽館一家言は、賀川惇德の著にして、婦人生殖器の解剖を累ね、その所見を公にしたるものにて、天保十二年の上梓にかゝれり。文政六年の刊行なる産科指南二册は、大牧周西の實驗錄にして、門人たる女醫森崎保祐の梓行せしものなり。奥澤軒中の産科發明、及び附錄あり。泰西の學說と符合するもの多し。附錄は圖解にして、器械の使用を示せしものならんも、世に傳はらざるを憾とす。

産育全書十二卷、探頷圖訣等は、水原三折の著なり。三折八十三の高齡を以て、元治元年京都錦小路の宅に沒するや、東洞院七條正行院、卽ち猿寺に葬り、醇生庵濟譽三折居士と諡せり。その産育全書は空前の大著述として、歡迎せられしも宜なるかな。長谷川杏庵、小篠昌榮の二門人、頗る力を之に致したり。又探頷圖訣、及び産育全書の挿畫も、世に歡迎せられたるの一因たりき。之につき一言すべきは、三折嗣子なきを以て養子を成しゝも、久しからずして離緣し、妾の姪を養ひて、丹靑家三谷五峰に娶はせ、之を養ふて後事を托せり。されど、水原の氏を稱せしめず、唯老を養ふの務を爲さしむるに佚ぎず。しかも五峰の畫に巧なるを賞し、己の著書に於ける、總ての挿畫を臨寫せしむるや、五峰、精力を籠めて之を描けり。これ三折の著書に、光彩を加へたる所にして、世人の歡迎を受けたる所以なりとす。

産科撮要は、天保二年の刊行にして、越後の醫金子杏庵の著なり。懷胎養生訓は、結城の醫官根本伯明の著、嘉永三年の出版なり。孕家發蒙圖解は、武藏の女醫山田久尾の著、嘉永四年の刊行にかゝる一小册子なり。産育大概は、高崎の侍醫藤崎東陽の著はす所、又華岡震の口授にかゝる、産科瑣言あり。播磨の醫師兒島恭齋の保産道志類邊、一名母子草三册は、天明六年の刊行なり。安産道志類邊三册も、亦同年に出版せらる。女科廣要五册は、多紀元堅の著にして、

支那醫方の拔萃なり。平野重誠の著にして、文政十三年の出版にかゝり、坐婆必研二冊は、賀川流の鉤を濫用するを慨き、女子、卽ち坐婆に委ぬることを主張し、併せて自己の手術を公にしたり。

産家敎草は、澁江太亮の著にして、門人の輯錄する所。産科集成三冊は、淺田惟常の著にして、支那醫方に依らず、專ら邦人の著書を輯錄して、玄悅一派の術に精くして、方藥に粗なると、青州、文道逸の二家は、術藥共に併せ得たるとを稱せるは、一見識あるを知らる。

保産心法、産家達生編、保産機要等の外、鈴木長庵の保養新論、和歌本草以呂波、中岡一得の無難産安生論、大西惟貞の産法略語、荻正卿の産事箋、加藤壽德の保産機要、安産祝多帶、産前産後切紙、住守氏の産科俗訓或は達生圖說三冊は、近藤直義の著にして、嘉永七年の發行なり。産論修飾三冊は、島田泰夫の著はす所、元治元年之を公にす。

以上の外、尙諸家の漫筆、或は小冊子なきに非ずと雖、此所に枚擧するの用なからん。唯記すべきは、解體新書なりとす。こは、近世期に於ける蘭學研究の賜にして、前野良澤、杉田玄白、桂川甫周、中川淳庵等、鋭意熱心飜譯に從事し、安永三年遂に上梓せられ、世人をして、泰西學理の精細なるに、驚歎せしめたるものなりとす。其の後、杉田玄伯の門人大槻玄澤、師命によりて、校訂修正を加へ、寛政十年、重訂解體新書を公にしたり。爾來、本邦醫術に蘭醫方の勢力を占むることゝはなれり。

宇津木益夫の著なる日本醫譜を見るに、女科醫の名を列するもの七十餘家あり。中に江戶の人浦部淵堂、器具を用ひず、體膚を傷けず、死胎と雖、必ず全うして、分娩するを得るの術を得と記し、又

一橋宗晴は、京師新在家に住み、八十九歳にして沒し、七世宗賢、婦人科を以て、更に祖業を世に彰はし、其の子宗喬、亦大に世に鳴り、家聲益々高し、家に神仙散、和血散あり、云々。

産科器具に至りては、賀川玄悦の鐵鉤は、斯術の進歩に伴ひ、然程の重寶たらす、否、續々之を否認する者出でて、片岡元周が英醫書より、二箇の匙狀鉗子を世に紹介し、智巧の醫士に勸め、賀川滿定の無鉤囘生術なる、一種の囘轉術に繼ぎて、探頷器の工夫あり。器は、既に前に掲出す。今、其の使用法を改めて錄すべし。破水已に終りて、未た分娩せす。時日經過すれば、母子兩斃の懼れあり。其の時に臨んで、之を施す可し。

　圓紐鯨を湯に浸し、柔軟とし、油を塗、滑澤ならしめ、醫師手腕の寸に應じ、陰腟より子宮口內子頸に傍ふて進め、扁鯨の兩目に、圓紐鯨の兩端を入れ、左手に圓紐鯨を持し、右手に扁鯨を進め、胎兒の頷に應ずるや否やを點認し、然る後握圓木と交換し、握圓木の四中央の二穴に圓紐鯨兩端を入れ、其の端を廻轉し、再び各其の隣穴に押入し、之を引力の基礎となし、右手に握圓を取り、左手に圓紐鯨を持し、力息に隨ひ牽出する事

とあり。

鈎胞器も、亦香川滿載の使用法によれば、左の如し。

胎盤子宮內に在り、胞帶切れて、出づる能はざる時用ふる術なり。

　左手に油をぬり、滑澤ならしめ、腟に入れ、鈎胞器を中指頭に進め、指頭一進ごとに器一進し、子宮內胞衣指頭に着當するを度とし、器を進め、胞衣を鈎し、徐々に鈎廻し、牽き出すべし。注意指頭より、鈎胞器を少しも上進す可らず。

山邊文伯の產育編に、英國の產科書より、フメルリー、パルフインなどの匙狀鉗子を紹介したり。蓋し、自己の意に改造し、單鋏、偏鋏、双鋏の三者を作りたりき。

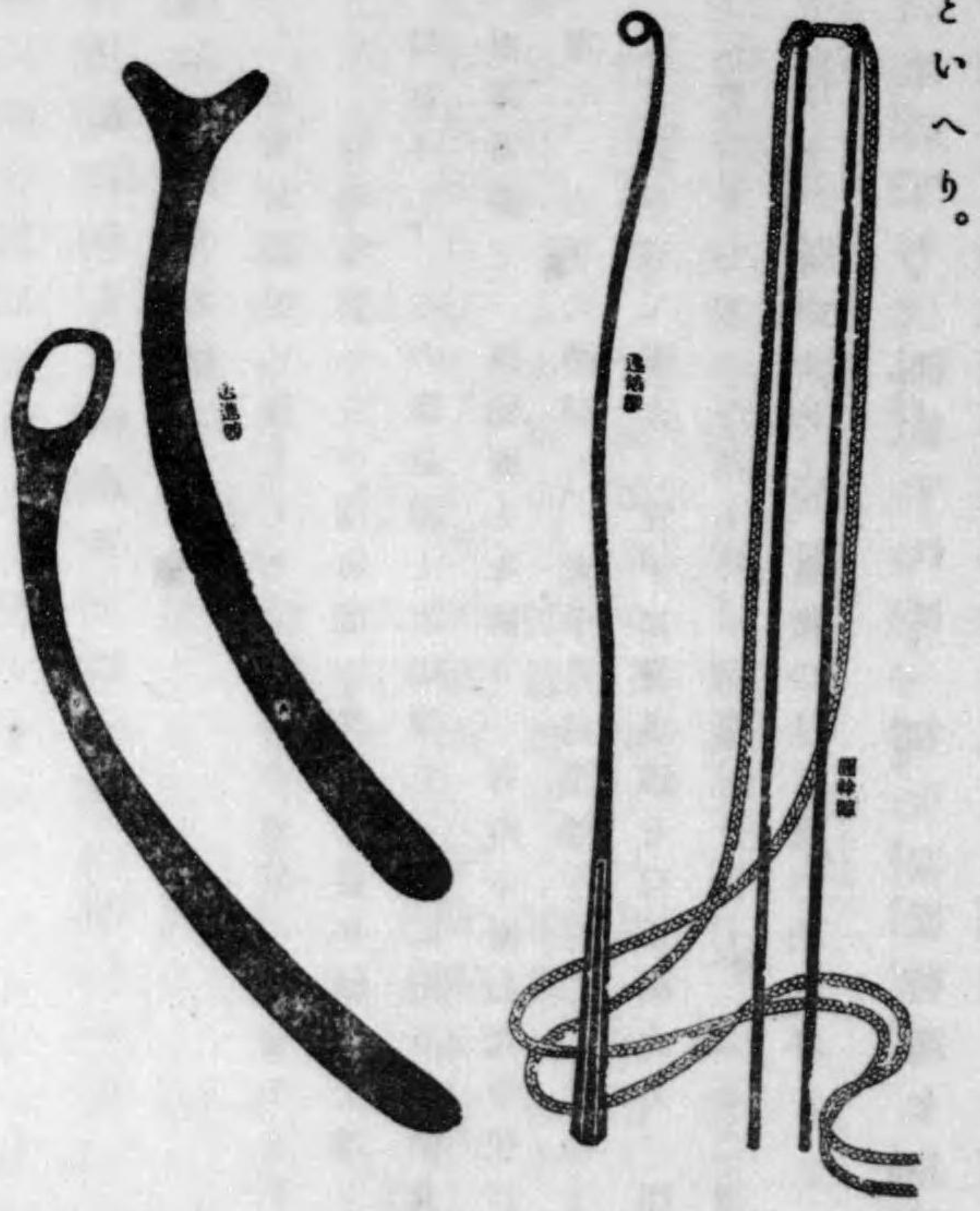
賀川滿崇、探頷器の不備なるを憂ひ、更に纒頭絹を案出したり。

其の製、先づ鯨鬚柱に縫ひ付けし、幅三寸五分、長二尺の絹を左右に中分し、その巻初は上端を緊軸し、半途に至りて下端を緊軸し、左右相合して一軸の如くならしめ、膣口の上下より挿入し、右手にて右軸を延ばし、左手にて左軸を展ばし、左右相共に兒頭を纏ひ、然る後圓紐鯨を扁鐵眼に挿入し、扁鐵を進めて克く緊紮し、左手に扁鐵を持し、右手に絹を把り、力を用ひて徐々に牽出するなり。尚、使用法を詳記すべし。

破水已に終り、産婦虚弱なれば、胎兒の生死に關せず、分娩せしむるの術なり。

兼て設けある鯨柱、長細穴に挿入する油滑絹を左右中分し、其の巻き初めは、上端を緊軸し、左右共に同じ、其の中途に至りて下端を緊軸し、左右相合して一軸の如くなり、其の時の便に隨ひ、膣の上下より挿入し、右手に右軸を延展し、左右共に同じく子頭を纏ひ終りて、兩柱鯨を扁鐵眼に挿入し、扁鐵を進めて能緊紮し、左手に扁鐵を持し、右手に絹を持し、力息に從ひ徐々に出す事、

といへり。



滿崇の次子滿載、更に整横紐を案出す。これ横位を變じて、骨盤位となし、分娩せしむるの器なり。その構造、二條の鯨鬚線あり、圓幹鯨と名付く、その一端に、各小眼を穿ち、こ

第五篇　近世　第二十八章　女科書と産科器具

れに細き絹紐を添へ、別に補助器として、運輸鐵と送進鯨とあり。使用法に曰く、横産手を出す者、難産中第一の難産なり。此の際に臨みて施すの術なり。

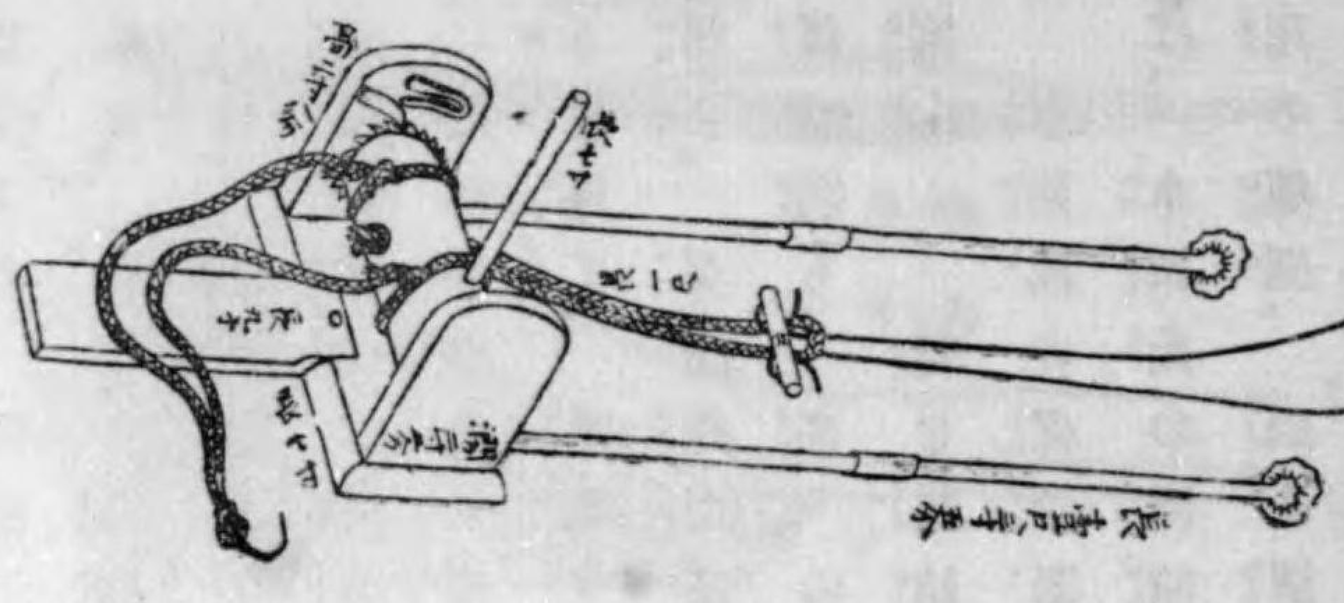
兩圓幹鯨眼に挿入しある、油滑絹紐の下端を左手に握り、胎手の傍より進め、運輸鐵眼へ左の圓幹鯨を挿入し是亦鯨の上端まで進め、左手に左の圓幹鯨を持し、右の圓幹鯨と運輸鐵と一齊に握り、胎兒の腰部を廻周し終りて、兩圓幹鯨と、運輸鐵とを除き、唯殘る兩紐端を雙持し、能く腰間を纏ふを點認し、右手に縛把し、左手に送進鯨を持し、其の上端を胎兒の脇に密着し、右手紐を以て牽き、左手は送進鯨を以て捧上し、粗々胎兒の足部、醫の指頭に把取せらるゝを俟ちて、送進鯨を撤し、右手に兩紐を緊紮し、右手の指頭を入れ、足部を鈎し、逆産の法に從ひ出す事

といへり。換言すれば、初に二圓幹鯨を相駢べ、兒の腰邊に挿み、次に運輸鐵を持し、其の一端なる眼孔に一幹を貫通し、後運輸鐵を進め入れ、幹の眼下に至りて、鐵條を以て鯨鬚條と合せて之を一廻して、臂の一方より周りて他臂に至り、兩圓幹と運輸鐵と併せて之を除き、絹紐の兒腰に纏ひたるを執りて之を擧ぐべし。かくて、一手送進鯨を取り、その股を兒の脇に當てゝ推進すれば、一手推、一手挽、兒位立所に變轉して、逆産となるといへり。されど、蘭齋劣齋兩醫の雙全術、即ち回轉術には、一籌を輸したるもの、如し。

包頭器は、立野龍貞の工夫する所にして、推送器、受袋器、及び附袋の三つより成る。推送器は、鯨鬚條の中央、運轉すべく交叉したるものにして、その兩條端に各細眼あり、之に同質の細條受袋器なるものを通じ、恰も蹄係の如くし、絹、即ち袋を附著す。推送器は、此の蹄係を自在に卷縮せしめんが爲のみの用なれば、袋の頭に纏ふや、直に之を引き拔くなり。袋は、額の方より顋に掛け緊柱すれば、受袋器に小管を通じて挽出す。之を包頭術といふ。包頭器は、鉗子を用ふる場合に使用せられしものにて、尚分娩せざる時は、横

蘇術を用ひたり。此の手術に用ふる器械は、生導器、及び擢骨釵なり。生導器にて頭蓋を破り、且つ腦髓を出し、擢骨釵にて脊椎の傍を穿孔し、兒體を縮小しながら挽出すなり。倘出でざる時は、知元の術、卽ち截胎術を施しゝとぞ。

漸次進步を來して、水原義博の探頷器出づ。器は三種より成る。一を探頷、二を睡龍、三を奪珠といふ。南華老仙の語に取れるものにして、其の製、探頷は一條の鯨鬚より成り、兒頷を探りて、之を牽くの用をなし、睡龍は、三孔を有する扁平長形の鯨鬚板より成り、探頷を拘束して、兒頭の滑脫を防ぐために用ひらる。奪珠は四孔を有する一の圓木片にして、睡龍を去りたる後、牽引に便ならしめんが爲、その孔に探頷を通じ、同時に轉脫を防ぐために用ひらる。後、又奪取車てふ一器を工夫し、牽引の際、腕力の足らざるを助けたり。されど、こは主として頭大の胎兒を娩脫せしむるに用ひ、彼の所謂、


奪珠車

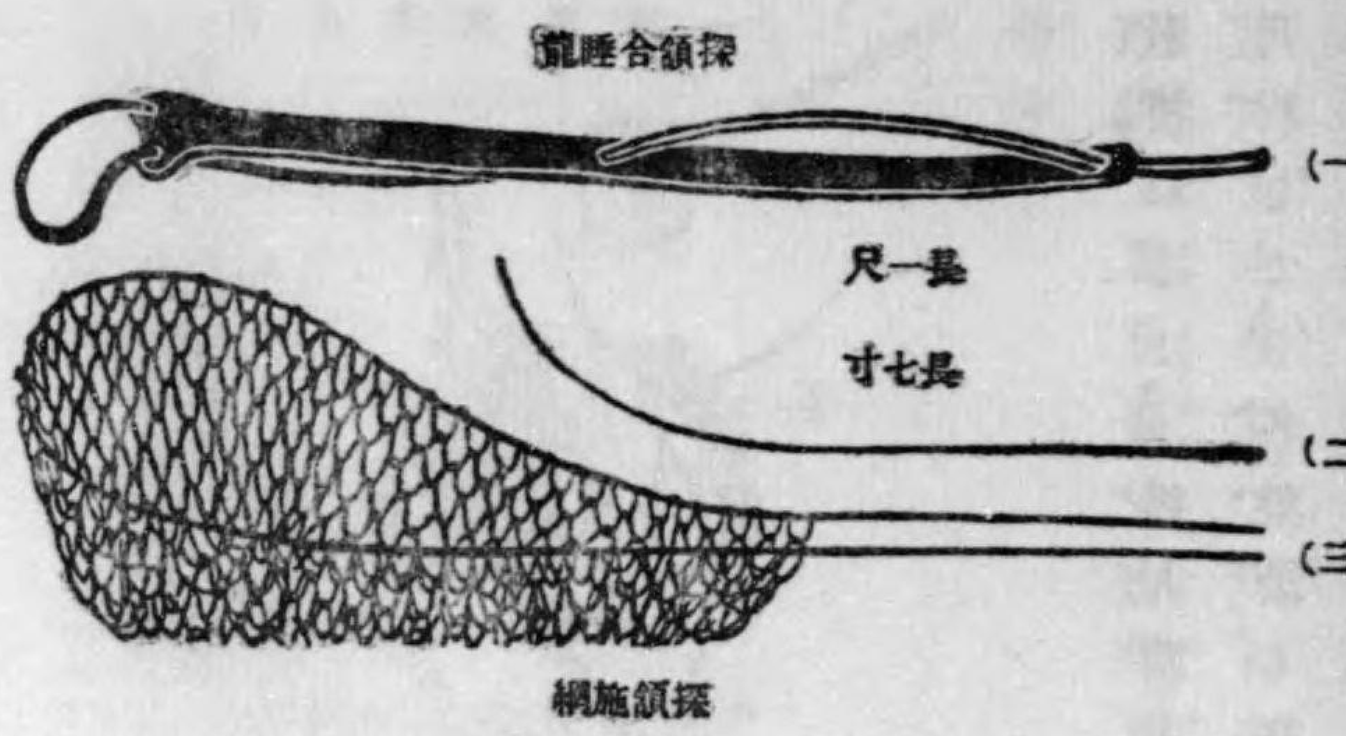
高閭巨室にして、婦の身體を、思ひの儘に接術することを憚るものに用ひたりき。圖はかくの如し。

探頷圖訣に委し。その探頷に網を施したるもの、頸斷用器と稱し、兒頭の離斷し、子宮內に殘留せるもの、又は、骨盤位の後進兒頭を取り出す爲に用ひたりしは、立野龍貞の包頭器に似たり。

水原氏の考案せる器、倘六種あり。一は子癎破膜器にて、卵膜を破るもの、二は、疏水器にて、兒頭を壓して利尿せしむる爲に用ふ。破膜器と共に、鯨鬚を以て造らる。三は、探股器にて、横產囘轉術の時、股を

探り出すもの、四は、導水管にて、「カテーテル」なり。三四共に、金屬製なり。五は、息胞用器にて、鯨鬚にて作り、胎盤を挾み出すもの、六は、潤胞器にて、羊水の排泄し盡したる後、更に粘滑液を子宮、及び產道內に注入する器にして、構造銀管に油紙製の袋を着けたり。之れ平野氏の坐婆必研に云へる、氏の手術の五なる、破水後久しきを經て、手術する時、粘滑液を陰道に入る可し、といへるものと同じ。又頸斷用器あれど、重用する所にあらざりき。

近藤直義も、亦一の包頭器を工夫す。その構造、二條の籐と、一箇の圓木と、籐を纏結する絹紐とより成る。蓋し、立野龍貞の包頭器と、水原氏の探頷器とを、倂せて改造したるものに過ぎざりき。されば、水原氏の探頷器は、產科器具の第一として尊重せられ、その使用の範圍、頗る廣く、後頭位は勿論、その腹面、側面、前顱位、顏面位、骨盤位、及び橫位の廻轉術を施すためにも用ひたり。

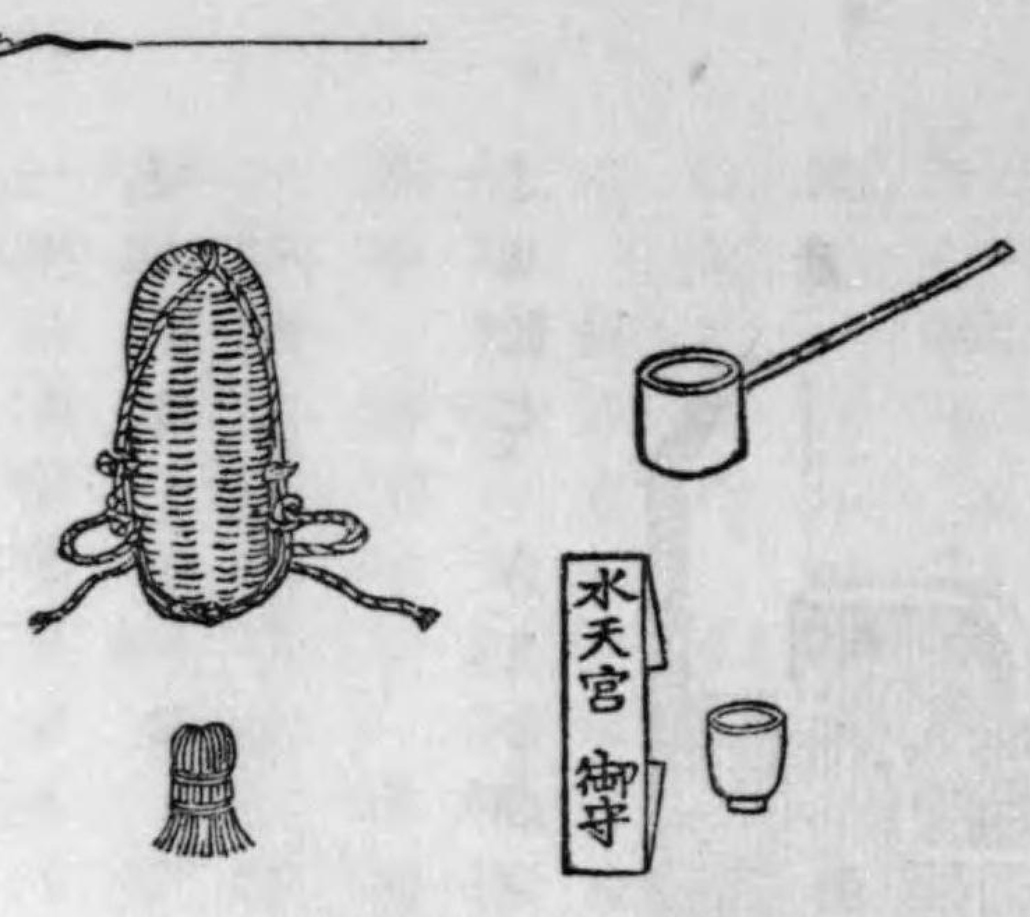


(一)　橫產用具
(二)　子癇破膜器
(三)　頸斷用器

水原氏の濶達宏量なる、從來醫家の門外不出、又は一家相傳などと稱し、その書と、その術とを秘密にしたりしを、毫も惜む所なく之を公にしたり。その書とは何ぞ、產育全書十二卷之なり。その術とは何ぞ、探頷器、その他の器械之なり。故に探頷器一たび世に出づるや、使用するもの多く、鉗子の普く用ひらるゝに至るまで、海內を風靡したりき。

探頷器運用第一

抑も、輸入醫療器の最も古きものは、「カテーテル」なるべし。之に次いで輸入せらしは、鉗子なるべし。こは文政六年八月八日、獨逸の醫師シーボルドによりて輸入せらる。シーボルドは、ウユルツブルグ大學產科兼外科解剖科教授カール、カスパル、フォン、シーボルドの孫にして、又、伯林大學產科教授にして、婦人科「クリニック」を開き、產院を剏置し、專門雜誌を刊行して、名聲最も高かりしアダム、エリアス、フォン、シーボルドの姪なり。此の鉗子携帶の恩人たるシーボルドは、年二十八にして長崎に來り、得意の外科、眼科、產科に妙技を施し、邦女園木氏を娶り、一女を生む、名はお稻、助產婦たりしと云ふ。「シーボルド」の事跡、門人高良齋の女科精選に委しといへど、未だその書を見ることを得ず。



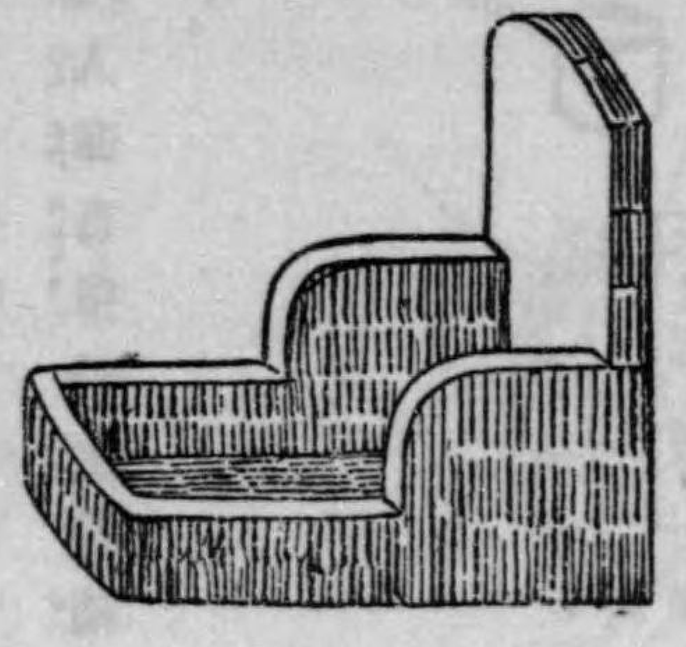
孕家發蒙圖解所載

事物の變遷進步は、一朝一夕にあらず、諸家の創意する所の產科器具、如上の如し溯りて之を蒙昧の世に稽ふれば、下胞の時に草鞋を足に括り、又藁だわしを嘗めさせ、檜杓の柄を口に入れさせ、以て胞衣を下すの術となせり。これ厭勝といふよりも、むしろ下胞の器として用ひたりしなり。仁王尊の腹帶をしめさせ、水天宮の守札を冷水に捻じて呑ませしも、

一種の產科器具たるを失はず。後人の見て嗤笑するは、うたゝその變遷に驚くの外なからん。

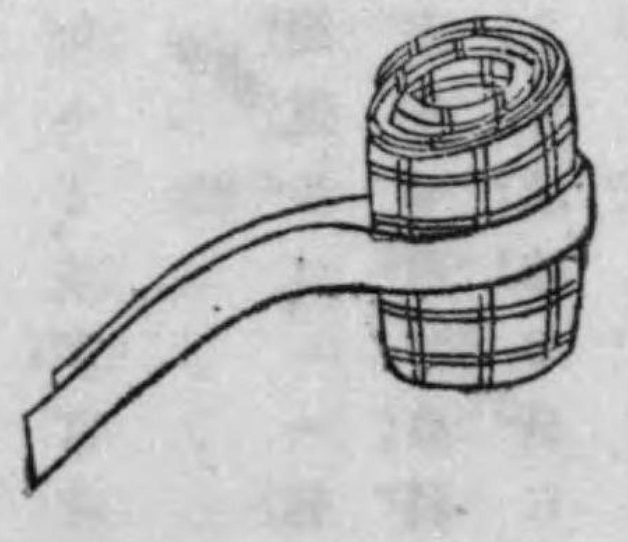
產椅に至りては、血暈を防ぐの一用具として、又床製によりて、產椅と相待ちて、產後の養生をなしゝものゝ如し。豈現代進步の點と比較し、古昔を想到するも、感興なしとせんや。

產椅



見孕家發蒙圖解

床製の圖



見孕家發蒙圖解

第二十九章　產科婦人科の發達と飜譯書

本邦建國の前後、風俗の美、流習の雅、異る所ありしと雖、その情況果して如何なりしやは、詳に之を知悉すること能はず。八雲たつの歌は、妻ごめに八重垣の伉儷を想はせ、和田の產屋、竹屋の斷臍、いづれか親愛の種ならざらんや。而して、助產術にまれ、娩產の法にまれ、任那と交通するに及び、變化を來し、王仁の來朝と共に、韓醫方入りぬ。佛教渡來五十餘年を經て、推古天皇の朝に唐醫方入り來りて、從來の醫學上に、一大變化を生じたりき。

青丹よし奈良の朝は、光明皇后の悲田、施藥の兩院創まりて、醫院の制興り、大寶令の醫事制度は補はれたり。されど佛教に左右せられし此の時代は、醫療よりも、加持、祈禱、厭勝、呪願の專ら行はれて、平安朝に移るや、百敷の大宮人は暇あれや、唐服着て、詩

の踏歌する世なれば、唐醫方行はれ、圓融天皇の永觀二年、丹波康頼、醫心方三十卷を撰したるも、幼稚の誹を免れず。唯、此の時代に於いて、女醫の制、卽ち助產婦の創設せられしことにて、此處に產科の起りしものと見るべし。

鎌倉時代は、宋醫方の輸入せられて、梶原性全の頓醫方、萬安方の二著あり。室町時代は、兵亂常の如く、漸く僧侶の間に、學術技藝は保持せられて、此所に明醫方の行はるゝに至りぬ。此の時代の醫家は、丹波、和氣の二氏の外、吉田宗桂、坂士佛、坂淨秀などあり。明應七年、田代三喜、明國より歸朝し、李東垣及び朱丹溪の醫說を唱へ、曲直瀨道三之に學び、李朱醫方を說き、此所に金元の醫學は興りて、宋醫方に代るに至れり。後人、道三を醫學中興の祖と稱す。產科、婦人科も、從來の面目を改め、稍實際的方面に向ひ、正平十三年、安藝守定、足利將軍家の侍藥に擢んでられ、始めて婦人科專門醫を出し、その勢力見るべきものあるに至りぬ。

織田氏は、名にも似ぬ安土の城の松枝、風折れて、桃の花匂ふ豐臣氏になりて、曲直瀨道三と同時に、關東に於いて、汗、吐、下、和、の治法を唱導せし永田德本あり。道三の爲に、勢力頓に失せつる室町以來の典藥中、半井家のみ、明英、瑞策、瑞桂ありて、家聲を墜さず、所謂半井氏婦人方あり。

中條帶刀、武士より出でて、中條流產科あり。吉益、板坂、乘附等の金創醫にして、產科を兼ねしものありしも、中條流の內服、及び塗藥の他、さし藥、卽ち子宮坐藥、並に灌腸法を施しゝが如き異彩を放たず。

天文十二年、葡萄人我九州の地に漂着してより、間もなく豐後、平戶、山口の邊、布敎師の來るありて、建國以來朝鮮支那の外、曾て接觸せざりし西洋の文物に、會合するの端緒を得て、西洋醫學の

輸入を見、外科の如きは、南蠻流と稱へて、彼に得る所多大なりき。獨り産科は德川氏の初期まで、格別の進步を見ざりしに、賀川玄悅出でて、鐵鈎を用ひ、助産の事、藥石の及ばざる所、手術に依らずんば功なしと唱へ、日夜研磨、多年に及び、古人に學ばず、獨得の技を施し、中條、板坂、乘附諸流に超越し、別に一家の見を立てたり。飜つて、我邦二千餘年の醫史を考ふるに、未だ外科手術と稱すべきものなく、殊に産科に於いては、僅に鍼刺の方あるのみ。他は方藥、符咒、厭勝の類なりしに、今や玄悅の技と、說とを見聞して、天下の醫家異口同音に歎賞し、曠古の一人とまで稱へ、漸く救護の術あるを知り、本邦の産科は、此處に至りて、大に觀るべきものあるに至れり。玄廸、玄吾等、相繼ぎ、相與り、我産科は新機運に向へり。

德川季世に至り、蘭學の輸入により、國民全體に、始めて生理學の感念を與へたり。そは前野、杉田、桂川、中川諸家の解體新書の飜譯なりき。その論說の精細、その圖解の緻密は、如何に邦人を驚したりけん。それより、我邦醫學に、蘭醫方益々勢力を占めたり。然も、此の時に當り、賀川流産術は弘く行はれて、片倉鶴陵は、産論、及び産論翼の誤謬を訂正し、英國産科書の鉗子圖を轉載して、鉗子の使用を告げ、奥劣齋も、賀川流の缺を補ひ、彼の六法に、定戰、即ち産後寒戰の治方と、發啼、即ち假死回生の二術を加へ、双全術を發明し、賀川流を完備せしめき。

賀川滿定は、探頷器を以て鈎に代へ、其の名大に彰はる。探頷器は、握圓木と圓紐鯨とより成り、鯨條を撓めて兒頭に懸け、之を握圓木の孔に通じて牽引す。長子滿崇、更に纏頭絹を創意し、父の創意を完うしたり。滿崇の子滿載、橫位整復用の整橫紐を發明し、産術に益する所多かりき。又、水原三折は、劣齋の門に出で、更に自

家の見と、西洋産科術の一端とを併せ、産育全書を著はし、我邦産科書の完備を見るに到れり。又、滿定の探頷器を改善し、握圓木に代ふるに、奪珠器を工夫し、尙諸種の器械器具を創製したり。是より先、文政八年、三輪順藏、彼の産論を蘭譯し、獨人シーボルドに示すや、シーボルド之を爪哇バタビヤ會報告書に掲げしかば、歐洲人の知る所となりぬ。此の間、江戸に足立無涯あり。西洋産科を以て、別に一家を成せり。

シーボルド、和蘭醫官として長崎に來るや、鉗子を齎し、其の用法を示し且つ外科、眼科、産科に亘りて、邦人に傳へたるもの多く、我邦醫界は、尠なからざる影響を受けたり。

爾來、西歐の文物制度入り來りて、茲に産科婦人科の上に、長足の進歩を爲し、學界の形勢一變し、粲然として、西歐諸州を凌駕するに至れり。

飜譯書としては、第一に訶倫産科書を記せざるべからず。こは、分ちて三册となす。原著はサキソン國ドレスデン府王國婦人科院長カルスなり。蘭人說氏の蘭譯せしものを、天保の初年、靑地林宗これを和譯したり。

醫方研幾は、足立無涯の譯著なり。和蘭産科醫として一家を立て、篠山侯の侍醫となる。吉田長叔に蘭學を學べり。

産科簡明は、蕃書調所敎授箕作阮甫の譯著なり。女科精選五册はシーボルドの門人、德島の醫家高良齋の譯著なり。

撒氏産論十册は、和蘭アムステルダム大學産科敎授ゲ、サロモンの原著にして、伊豆韮山の矢田部卿雲が、弘化二年に飜譯せしものなり。原著初の五册を究理篇と題し、妊娠、分娩、産蓐、解剖、生理、病理を述べ、後の五册は、施術篇と題し、手術を論じ、鉗子の解說に努め、スメルリー、レヴレーの兩鉗子を推稱せり。

婦人病論六冊は、本邦に於ける、最初に刊行せられし泰西女科書なり。原著者はフレンキなり。譯者は京都の女科醫船曳子錦の子德夫、父子錦は播磨の人なり。和蘭の女科書を求めんとして山崎玄東に謀る、玄東告るに之の書を以てす、四方に捜索して、漸く之を獲て、直に男德夫に譯せしむ。時に嘉永三年なり。此の書、始は二卷に於いて、婦人病を論じ、後の四冊に於いて、產科に關する疾病を擧げ、その手術を載す。

和蘭產科學は、山城國伏見の醫師北村金吾の譯述する所、その原著者不明なり。

婦嬰新說二冊は、英醫ホブソンが、咸豐八年、卽ち我安政四年夏、清國上海にて著述せしを、安政六年、京都にて安藤桂洲訓點して飜刻し、其の後十四年を經て、明治六年、京都の廣瀨元周和解したり。此の書漢文なりしを以て、當時漢方醫の手に披かれ、幸に洋方を、彼等の腦裏に傳ふるを得たり。

第六篇　近代史

第三十章　産科婦人科に於ける諸種の發達（其の一）

明治維新に際し智識を世界に求め、大に皇基を振起すべしとの聖旨は、直に以て諸制度文物の輸入となり、二千年來、支那、及び印度の文化を容れたる我邦の文化は、茲に急轉直下して、歐米の文物を採り、翕然として、最も目覺しき變化を來すに至れり、殊に、醫學の如き科學は、其の光輝を放てり。今産科、及び婦人科に於ける各種の發達を列叙するは、予の欣喜に堪へざる所なりとす。

明治元年、大病院を東京なる舊藤堂邸に設立し、次で醫學所を創建し、醫育、及び療病に從事せしめらるゝ事となりて、醫界の面目は革まりしも、産科、婦人科は、他科に比して、頗る未だ振はざるものありき。同年十月十四日、内務卿は産婆取締規則を發布し、産婆にして賣藥、並に墮胎を行ふことを嚴禁したり。之所謂、中條以後元祿時代に於ける墮胎の惡風を抑止したるものにして、助産婦に關する法令發布の嚆矢なりとす。

明治二年、和蘭の醫ボードイン、始めて我大阪病院に赴任す。氏は來任の途次、卵巣手術家として有名なる、英國の醫士スペンサ、ウエルスの手術を見學し、「オバリオトミー」の器械を將來したり。氏は又、英國の醫リスターの手術により剔出したる、生殖器の標本を石炭酸溶液中に浸して携帶し、其の防腐の效力に就て、開業醫、及び學生に示し、同時にリスターの防腐法を唱導せり。是恐らく我邦に於ける、石炭酸防腐法の始なるべし。

翌三年、我政府は醫科大學に、獨逸國より敎師を招聘し、斯道の研究に努めしも、獨産科のみは重視せらるゝに至らず、寧ろ度外に置かれしやの觀ありて、一週僅に一時間の講義を爲したるに過ぎず。

特に產科の如きは、曾て講壇に上らざりしが、明治四年に到り、東京大學雇教師ミュルレルは、外科、及び婦人科病回診てふ課目を設け、講義を開始したり。されど、其の學生は本科生と、醫院生との區別ありし醫院生に向ひて、第一期に一週一時、第二期に一週二時づゝ婦人科回診を課せるのみにて、之を眼科の一週六時間の講演ありしものに比し、實に遺憾なき能はざりき。

ミュルレルは、又石炭酸を以て創面を洗滌し、同雇教師シュルツは、リスター消毒法をも講義せしかば、防腐法は漸く紹介さるゝことを得たり。

ホフマン、及びミュルレル兩教師は、醫育に從事するの傍、我邦の醫事衞生事項を調査し、又東方亞細亞協會と稱するものを起し、日本醫學中、最も進歩したる技術を報導せんことに努めたり。時に明治五年なりとす。

三宅秀は、我邦中古以來專門醫科中、最も發達せる助產術の皷吹に力を盡し、香川氏產論の大意、殊に整橫紐、探頷器、纏頭絹などの諸篇を飜譯し、歐人に紹介したり。先之、文政八年三輪順藏が、賀川氏產論を蘭語に譯し、シーボルド主幹の雜誌に登載せしものに對し、今や氏によりて其の缺を補ふことを得たり。

明治六年、杉田玄端は英醫ミードの著書を譯述し、產科寶函と題し、袖珍本として出版し、次で高橋正純は大阪醫學校に於ける、雇敎師なる蘭醫エルメレンスが產婆の爲に講述せしものを大川某に筆記せしめ、之を譯述して日講記聞產科論と題し刊行せり。鉗子挽出術より、破顱術に至る、二冊に分刷す。小林義直は米醫ハルツホルンの七科約說の一部、卽ち產科摘要を飜譯せる等、明治時代に於ける產科書の先驅を成せり。

翌七年、ミュルレルに代りて、獨逸國の醫ウェルニッヒ來任す。氏は

本國なるケーニグスベルグ大學に學び、卒業の後伯林大學に來り、産科婦人科の講座を擔任し、一千八百七十四年、日本政府の聘に應じて來朝し、內科、及び婦人科の講義を擔當したり。來任中、著す所、脚氣說等あり。一千八百七十七年任期滿ちて國に歸り、再び伯林大學の內科敎授たりき。我東京大學に在るや、産科講義を、各學期一週二時間、婦人科講義を夏學期中、一週三時間づゝ敎授せり。然れども、未だ十分なる課程と云ふことを得ざりしも、我邦に於ける斯科の獨立は、正しく此の時なることを史上に特筆せざるべからず。

翌八年、政府は勅令に依り、新に産科を以て專門的に開業せんとするものには、其の局處解剖生理學、及び病理學の試門に及第したる者に限り、之を公許せり。

同年五月十四日、文部省は産婆規則を發布し、産婆の修業すべき科目を定め、解剖生理、及び病理の大意を理解する者には、內務省の免許を與ふる事とし、尙職務上の制限等を制定し、助産婦制度の端緒を啓けり。

同九年、獨逸國醫學博士ベルッツは聘に應じて來朝し、ウエルニッヒに代れり、氏は內科專門醫として、傍産科を分擔兼任し、明治十六年に至れり。ウエルニッヒ、及びデーニッツは東亞細亞人の骨盤、及び分娩の關係に就て、その「デモンストラチオン」を行へり。而して、兩氏は又我邦婦人の骨盤に於ける二種の型式あることを說き、一は「アイヌ」人種にして、一は蒙古人種とし、尙兩人種の混成したる骨盤模型の存在せることを公にしたり。

大阪醫學校病院に於ては、産婆學の敎授を開始し、卒業者百七十五名を出し、之に營業鑑札を與へぬ。これ我國に於ける産婆免許の始なりとす。

同十年、西南の役起るや、橋本綱常は負傷兵士に、始めてリスターー消毒法を施し、軍陣醫學上の好成績を得たり。是本邦人に該法を試みたる濫觴にして、我産科婦人科手術に之を應用せしも、亦此の時に創まれりと云へり。

大學にては、ベルツ教授の下に通學せし櫻井郁二郎は、婦人科産科の助教授となりて教掌し、山崎元脩はベ、エス、シュルチヱの産婆論を譯出して、本邦に於ける産婆教科書飜譯の先着を成せり。

同十一年、物部誠一郎は刀圭雜誌第一號に、英國フライヘールの産科全書中なる胎兒心音の聽診法に就き、其の一部を飜譯して掲載し、又米國産科雜誌中の、卵巢截除術、及び産科的治療法に關する治驗を飜譯し、之を公にしたり。

又此の年に於て、ウエルニツヒは日本に於ける醫史、及び江戸時代の外交、並に臨床的患者の統計と題する論文を公にしたり。之を見るに、内科的疾病の記載あるも、助産、及び婦人科的疾病に至りては云ふ所なく。就中、開腹術の如きは、絶えて記する所なし。當時大阪病院には、マンスフェルドありて、熱心に内臟手術の率先者たらん事を希望したりしも、これが受術を承諾する者なく、遂に空しく其の目的を達せざりしといふ。

明治十二年に至り、東京醫學會は、内務省衞生局の飜譯にかゝる七科問答中、産科學を版行し、高橋正純は、英醫スウインの原著にして、千八百六十七年、蘭醫ブルールスの蘭譯せし産科要訣を譯出し、山崎元脩は婦人病論を出版す。之實に日本に於ける最初の婦人科教科書とす。

先之、嘉永三年船曳卓堂が著述せし婦人病論は、布歛吉の婦人科書を飜譯せるものにして、蓋し西洋婦人科學刊行の始なるものなりき。斯の如く、泰西の産科婦人科書の譯述盛に行はれ、斯道漸く進

捗するに至り、翌十三年、渡邊越は、フォン、ニーマイルの著なる、內科書中の婦人病論を英譯して、千八百七十八年、米國にて出版せる、其の四版、即ち女科約說を飜譯し、之に米醫トーマスの婦人科診斷篇を加へたり。之本邦に於ける、婦人科診斷學を紹介せし始なりとす。この年九月、岡山醫學校病院にては、婦人科を獨立せしめ、原田元貞之を擔任し、又「ファントーム」演習をも開始せり。

明治十四年、石神亨は熊本私立病院に於て、始めて「オバリオトミー」を施し、緒方貞甫によりて之を報告せり。當時東京大學にても、スクリッパの施行したる、「オバリオトミー」の數僅に二三に過ぎざれば、如何に婦人科大手術を施すことの困難なりしかを知るべし。

今年櫻井郁二郎は紅杏社を設立し、產婆養成を成す。之民間に於ける日本助產婦養成所の始なり。又氏は、十三年九月以來、帝國醫科大學別科生に講述せし「メモランド」を、婦人科論と題し出版せり。

翌十五年、文部省は醫學校の通則を甲乙二種に分ち、甲種科中には助產科を加へたれど、婦人科は未だ之を設けざりき。

翌十六年、獨逸に留學せし清水郁太郎歸朝し、帝國大學教授となる。こゝに於て、始めて邦人によりて、產科婦人科の講演を開かれ、產科模型演習を始む。まづ第一の冬學期には、產科講義一週二時間とし、次の夏學期に至り、婦人科講義一週二時間、他は模型演習と規定せり。實に、產科婦人科に於ける專門家として、別に婦人科教室を設け、產室を備へ、學說以外に臨床講義をも創め、斯科教授の新設備に、教授資料に、一新面

清水教授小照

目を革めしに、惜いかな、氏は拮据精勵、教務に努力すること僅に一年餘にして病を獲て、明治十八年二月歿去す、行年二十九なりき。

清水教授逝いて、又ベルッ教授の擔當に復し、三年間持續したり。ベルッ教授は在職中、日本婦人體格の特性に就て、有益なる論文を公にせり。

十七年に至り、第一醫院に婦人科を分設し、新に産室を造らる。從來助産科の實地は、模型のみを以て演習せしめたりしが、此の時より妊婦に入院を許し、學生をして之を實驗せしむることゝなりぬ。京都醫學校病院にては、此の年四月、助産科、及び婦人科診療を獨立せしめ、武部隆太郎をして、之を擔任せしむ。

又吉田顯三は産科學を編述し、石川清忠、長谷川泰等は、昆氏産科學を譯出したりき。翌十八年四月二十八日、福岡病院長外科主任大森治豊及び婦人科主任池田陽一の二氏は、瘢痕性膣狹窄病に、ボロー帝截開術を施し、良成績を得、續いて十一月二十一日、石井は狹窄骨盤に保存的帝截開術を行ひしも、成績不良なりき。蓋し我邦に於けるボロー、及び保存的帝截開術は、此の時を以て始とす。

明治十九年、櫻井郁二郎は第二醫院に於て、醫科大學別科生に、産科、及び婦人科の講演を爲し、又外來患者の診療を始めたれども、産科手術としては、僅に鉗子手術、挽出術、及び穿顱術等に過ぎずして、洽く學生に演習せしむることなく、又婦人科的大手術は、之を外科に依賴するの有樣なりき。

同二十年、京都醫學校教諭足立健三郎は、武部隆太郎に代りて、産科婦人科を擔當し、「パントーム」演習を開始し、又猪子止戈之助と共に、婦人科手術を施しゝが、後足立氏自ら之を分擔せり。又榊順次郎は、帝國大學第一醫院婦人科の助手となり、日本婦人の骨盤檢査、並に妊娠分娩に就て、詳細なる統計的報告を作り、斯界に裨益

を與へたり。

既往二十年間に於ける、我邦產科婦人科の發達は、清水教授の歿去と共に、一頓挫をなし、該科は再び內科醫の手に歸し、其の進步頗る遲々として緩慢なりしかば、歷史的記事の材料なかりき。

然るに、明治二十一年九月、濱田玄達、獨逸より歸朝し、產科婦人科の教授に任命せらるゝや、茲に始めて、該科の完成することを得て、產科婦人科手術、殊に內臟手術は、始めて嚴正なる防腐的處置の下に行はれ、然も特別手術臺を新設し、その面目を一新したりき。濱田氏は、肥後國宇土郡里浦村の人、世々醫を以て業とす、安政元年を以て生る。明治三年、藩主醫學校を開くや、氏入りて蘭人マンスヘルドに業を受く、翌四年上京して、大學南校に入る、年十八。明治十三年七月、卒業して醫學士となり、熊本醫學校教頭に任せられ、次で熊本病院長となり、翌年醫學校長と成る。十七年獨逸

に遊學し翌年留學生と成り、產科婦人科の專攻を志し、ミユンヘン大學教授ウインケルの指導を受け、二十一年八月歸朝し、直に醫科大學教授に任じ、產科婦人科教室主任たり。於之、一新紀元を爲したること、前に記するが如し。試に、擧げん、明治四年より二十年に至る十七年間、大學婦人科に於ける開腹術は、僅々四五回に過ぎざりしに、氏就任以來、明治三十三年に至る十一年間、五百十六回の多きに達し、其の他手術も亦、著しく增加したり。

濱田博士小照

かくて、氏は明治二十四年、醫學博士の學位を授けられ、二十九年醫科大學長に補せら

れ、高等官二等に進敍す。氏手術に方り、誤りて一眼を傷け、視力節を失し、三十三年四月職を辭し、私立東京産科婦人科病院長となり、宮内省御用掛を命せらる。

又明治二十一年五月、濱田玄達は我邦未だ完全なる産婆養成所の設なきを憂ひ、醫科大學内に産婆養成所を設立せんことを建議せり。櫻井郁二郎は、自己の經營せる病院に産科婦人科研究會を開設し、大學の産科婦人科研究に對峙し、茲に始めて該科の競爭的進歩の端緒を開けり。千葉縣立醫學校病院にても、産科婦人科を獨立せしめ、長尾精一を以て、之を擔任せしめ、仙臺醫學校病院にても、該科を分立せしめ、棟方隆を以て、主任者となしたり。この間淺山義六は、正規分娩に於て、全く待期的に成したるもの、及び壓出法を行ひし者に就き、其の血液損失の關係を論述して公にせり。

以上、略々二十一年間に於ける制度、並に學術、及び醫育の發達を述べたり。

第三十一章　産科婦人科に於ける諸種の發達（其の二）

明治二十二年、佐伯理一郎は、始めてチューレ、ブランドの婦人科的按摩術を我邦に紹介し、氏自ら之を病者に實驗せり。茲歳に至り、曾て濱田玄達の提議せし産婆養成所の開始を見る事となれり。

愛知縣立愛知病院にては、從來婦人科大手術は、外科長熊谷幸之輔の兼任なりしに、此年十一月堀内篤藏をして、之が專任者とし、弘く手術を爲すこととなれり。吉田顯三は、婦人科病論を編著し、之を刊行したり。

翌二十三年、岡山醫學校教諭熊谷省三は、育生會を設け、産婦人科醫師、並に助産婦の爲に講演を開始し、斯道の發達を圖れり。又大森、池田の二氏は、卵巢囊腫に於ける實驗五十例に就きて、自己

の考案せる「フクシン」手指染色消毒法を行ひて、手術したる其の四十六例中、唯一人の死亡(虚脱)と、三回の手術中止とを除き、他の四十三例中、即ち九一、八布仙は全治せしことを公にせり。是本邦に於ける多數の統計報告を爲したるもの〻嚆矢とす。

足立健三郎は、此年八月京都に於て、全子宮腟內剔出術を施し、又九月岡山醫學校病院に於ても之を行ひ、東京にては濱田玄達、大阪緒方病院にては濱田美政等、共に該手術を施行したり。濱田玄達は、又尿意淋瀝症に對し、外科的手術を試みたり。この法は、嘗てべ、エス、シュルチエの創意にかゝる術式にして、我邦に於て之を實地に試みたるは、二氏に次て緒方正清の施しゝを以って始とす。

菅之芳は、岡山縣立醫學校內に、產婆看護婦養成所を設立したり。

下平用彩、吾妻慶治は、ハーケの產科樞要を譯述し、之を出版したり。

翌二十四年、緒方正清は、獨逸フライブルグ大學に於て、日本產科史を著述せり。先是、文政八年、三輪順藏が賀川玄悅の產論を蘭語に譯述して、シーボルド產科婦人科「ジョルナール」に記載せしより、以後明治五年、三宅秀、之を獨逸語に譯出したりしを、今や緒方正清の增訂補足する所によりて、我邦助產科の歷史は、洽く外人に紹介せらるゝに至れり。

柳琢藏は、大阪府立醫學校敎諭となり、先に吉田顯三の兼掌せし外科、及び婦人科の敎授を擔任し、玆に全然該科を獨立せしめ、從來英國式の治療法なりしを獨逸式に改良し、又婦人科手術は之を外科より分離し、氏自ら執刀して施術に從事し、大に助產科の發展を計り、全く從來の面目を一新せしめたり。

柴田耕一は、授乳能力を爲し得べき頻度、及び褥婦授乳の結果に就き、獨逸文を以つて、之を斯界に報告したり。

翌二十五年、河本重次郎は、妊婦の蛋白尿に合併せし眼の障害に對し、早産術の利益あることを主張し、其の論文を公にしたり。緒方正清は、此年六月大阪に助産婦養成所を設立し、助産婦を養成し、同時に舊産婆に對し、「ファントーム」演習を開始す。助産婦の名稱此の時より始まれり。

林英雄は、桂田教室に在りて、外陰部象皮病に於けるラングハンス巨態細胞の一例を報告し、吉田顯三は、卵巣嚢截除術を行ふこと百回に達し、大森、池田二氏は、「オバリオトミー」を行ふこと百回なりし、其の報告を獨逸文もて公にしたり。遠藤外三郎、高阪駒三郎等は、ウインケル産科全書を譯出し、佐藤勤也は、實用婦人科學を著述したり。

王政維新以後、既に二十有六年、文化日に月に進み、刀圭界の進歩、亦大に見るべきものあり。殊に産科婦人科に至りては、茲に獨立したれど、婦人科的開腹術の如きは、尚外科醫なる佐藤進、大森豐治、伊藤隼三、猪子止戈之助、吉田顯三、井上平造、熊谷幸之輔、北川乙次郎等諸氏の手を離るゝに至らざりき。當時婦人科醫としては、東京に濱田玄達、佐藤恒久あり、大阪に柳琢藏、緒方正清あり、福岡に池田陽一、金澤に山田謙次、長崎に高山尚平、京都に足立健三郎等の諸氏割據し、いづれも婦人科の手術家として、外科醫に對峙したりと雖、困難なる手術は、依然として外科醫の手腕に待たざる可らざるの有樣にて、婦人科醫の手術は遺憾にも雨夜の晨星に等しく、寥々として數ふるに足るものなかりしかば、婦人科手術家は慨然蹶起して唱導し、漸く婦人科醫の自ら大手術を行ひ、殆んど外科醫に對する競爭的奮鬪の結果、終に外科醫の手より囘收して、專門的手術は、茲に獨立して、當然婦人科醫の掌裡に歸したり。されど、當時を追懷すれば、轉た心肝をして慄然として寒からしむるも

のあり。

明治二十五年三月の交、緒方收二郎、緒方正清等の、始めてシンメルブッシュ殺菌釜を獨逸より舶來し、繃帶材料、及び「ガーゼ」等の殺菌を行ひ、全く乾燥處置の下に開腹術を試み、頗る佳良の成績を得るや、翌年に至り、三宅速の紹介によりて、中外醫事新報に於て報告せられしに、今や全般に之を行ふに至れり。こは從來行はれたる濕潤處置に代ふるに、乾燥處置を以てしたるものにて、我邦に於て大森、池田の二氏が之に類似の方法を試みたるものに比し、このシンメルブッシュの殺菌乾燥處置の時代となれるに徵するも、斯界の進步を證するに剩あるものと謂ふべし。

翻つて、此の年間に於ける帝國大學の一覽を見るに、產科學、及び婦人科學の二科目が、その敎課中に判然明記せられしは、明治十五年、乃至十六年にして、ミュルレル、ウエルニッヒ、ベルツ三雇敎師時代には、時として該二學科の、學課配當表中に記載せられざる時ありしも、清水敎授の任に就くや、每學期その記載を缺きしことなく、助敎授櫻井郁次郎、助手浦島堅吉、尾澤圭一、柳琢藏等は、本科別課の各敎授に鞅掌し、更に濱田敎授の就任を見るに及んで、顯著なる發達を來し、清水敎授によりて開始されし講義實習等以外に、臨床講義、產床實習、手術傍觀などの制を始め、學理と實地と兩々相俟つて美果を收むるの秋至りぬ。濱田敎授の、銳意敎授と施療とに當り、以つて今日の盛況を見るに至れり。

明治二十六年、醫科大學は產科婦人科敎室、及び病室の新築を爲さんとし、その位置設計等を決定したり。同年四月九日、濱田、千葉、佐伯、朝山、相磯、及び緒方正清等は、東京上野櫻雲臺に會し、日本產科婦人科學會設立の件を議決し、尚無定期雜誌を刊行することをも計畫せり。

此年、佐藤恒久、高山尚平、緒方正清等は、筋腫剔出術を主張し、濱田玄達は之に反對し、麥奴の內科的療法を推薦せり。又高山は、後腹膜外處置を、佐藤、緒方は、ヘーガル腹膜外處置を行ひ、孰れも同一の成績を得て、之を報告したり。續いて緒方正清は、ヘーガルの創意せし、膣會陰縫合術を紹介し、又之を數十人に實驗し、その治驗を明細に報告したり。

柴田耕一は、獨逸國にて創意出版せる、紙製產科模型を日本文にて出版し、助產婦、並に醫學生に向ひ、之を演習に用ひんことを推薦せり。之本邦に於ける、產科演習器の始とす。池田陽一は、發作的に發現する正調的胎兒運動、及び先天性橫隔膜「ヘルニヤ」に就て、並に母兒兩體に好結果を與へし帝截開術、及び少陰唇の外傷性炎性癒着の一例と題する論述を、いづれも獨逸文にて中外に報告したり。

翌二十七年、長瀨時衡は、ヒュテルハートの子宮按摩術を紹介し、

氏自ら之を患者に實驗せり。緒方正清、高橋辰五郎は、ファイトの診斷學を譯し、之を出版せり。翌二十八年には、富士川游、吳秀三、增田知正等は、古來本邦に於ける產科上の刊本、並に未刊本、或は秘錄、雜著を蒐緝編纂し、日本產科叢書と題して、出版したり。緒方正清は、婦人科手術學を著はせり。

明治二十九年、緒方正清は、大阪に於て月刊雜誌助產之栞を發刊し、產婆の改良と助產婦の修養とを圖り、兼て斯道を獎勵し、社會の覺醒を促し、傍歐洲に於ける助產婦の制度、及び諸家の學說、實驗等を紹介せり。之本邦に於ける助產婦雜誌の嚆矢とす。又緒方正清は、開腹術施行百回の報告を江湖に公にしたり。

翌三十年、緒方正清、高橋辰五郎は、日本婦人の生體骨盤計測法を行ひ、正規、及び異狀骨盤の狀態を明にし、又曾て福澤翁の慫慂せし、八瀨大原女、卽ち勞働婦女の骨盤を檢査し、その比較成績を

發表せり。木下正中は、子宮外妊娠に於ける、腹膜上皮細胞の病理組織的檢査の成績を獨文にて中外に報告せり。明治三十一年、高橋辰五郎は、日本助産婦新報を發刊し、助産婦の改良と産婆敎育法とを奬勵せり。高山尙平、緒方正淸は、自己の實驗上より、トレンデレンブルグ位置の利益あることを說明し、從來の手術位置を改良せんことを唱道せり。佐伯理一郎は、京都産科院を設立し、貧民に對し施療を開始せり。二川銳男は、レオポルト、及びツワイフェルの産婆敎科書を譯出したり。山極勝三郎は、癌腫性變性、及び轉位せる卵巣皮樣囊腫に就て、又伊東精一は、膣の纖維腫囊性纖維腫、及び腺胞性纖維腫に就て、河野徹志は、恥骨縫際截開術、及び其の實地的價値に就て、いづれも、その所論を報告せり。

三十二年五月、池田陽一、高山尙平、柳琢藏、足立健三郎、佐伯理一郎、緒方正淸等は、關西産科婦人科學會を設立し、その第一會を大阪に開催したり。同年七月八日、内務省は、産婆規則を制定し、續いで九月六日産婆試驗規則を發布し、從來内務省に設けたる試驗委員を廢し、各府縣に於て、地方長官をして之を行はしむることゝしたり。繼いで産婆名簿登錄規則を公布し、更に産婆試驗規則を發布す。於之我邦助産婦の制定確定し、舊來の面目を改めたり。此の年、京都帝國大學創立せられ、産科婦人科講師として、高山尙平赴任したり。

大阪府知事は、各府縣に先んじ、産婆組合規則を發布し、大阪産婆會を組織す。香川、新潟の諸縣、相繼いで助産婦學校を設立し、郡村費を以つて、助産婦の養成を開始し、一面舊産婆の補修的奬勵を爲せり。蓋し各府縣に卒先して、その美事を遂行したるものなり。木下正中は、東京醫科大學内に助産婦復習部を設置し、内務省試

験に合格したる助産婦について、高等なる實地演習を學ばしめたり。高山尙平は、始めて邦人に「ベラスツング」療法を施し、多數の實驗を爲せり。木下正中は、池田陽一、緒方正清と共に、ピンクスの蒸氣燒灼法を紹介し、各其の實驗を公にし、辻高俊は、子宮膣部の結核について、金森辰次郎は、卵巢腫瘍の轉移について、中島襄吉、辻高俊、森永友碩等は、子宮破裂について、各其の實驗を報告せり。又緒方正清は、「オバリオトミー」百五十回の施行報告と共に、我邦專門家の統計を蒐集し、日本に於ける現代「オバリオトミー」の治癒成績の九、六布仙なることを發表したり。

榊順次郎は、ツワイフェル、レオポルドの產婆學を、下平用彩、小川勝陳等は、シュロエデルの婦人科病學を、新井古芳は、デーデルラインの產科手術學を、水原漸、千葉稔次郎は、ルンゲの產科學を、いづれも譯述したり。

明治三十三年、關西產科婦人科學會第二會を京都に開催す。緒方正清は、帝截開術に於ける一新法として、我邦に於て未だ行はれざりしフリッチの子宮底橫截開術を施し、其の良成績を公にし、從來の縱截開術に比して、遙に優れることを報告せり。小金井良精、大澤岳太郎は、日本人、及び「アイヌ」種族の生體、及び屍體骨盤について、精細なる解剖的檢査を施し、その所感を公にし、斯道の爲に益する事多大なりき。

楠田謙藏は、レーライン婦人科的防腐法を、平出謙吉、柴田耕一は、充爾僊婦人科準繩を、いづれも譯出し、佐藤勤也は、實用產科學を編述し、緒方正清は、婦人科臨床軌範を出版したり。

此年四月、醫學博士木下正中は、帝國大學なる產科學婦人科學敎室を擔任し、濱田敎授に代りて、專ら敎育と治療とに從事することとなれり。此の時に當り、該二科の學生も頓に增加し、入院參院の

產婦も亦、著しく夥多となりたり。

翌三十四年、木下正中は日本婦人に就て精密なる分娩調査を行ひ、歐洲人と日本人の分娩の狀態、及び時間等、有益なる論文を報告し、佐藤勤也は、惡性脫落膜腫の實驗を公にせり。此年緒方正清は、假死に陷れる初生兒の蘇生術に就いて、從來汎く應用せられつゝあるシュルチエの振搖蘇生術が、本邦の家屋、及び習慣に適應せざるを解き、新に自家考案に成れる新蘇生術を公にし、緒方式蘇生術と名けしに、歐洲の諸大家は其法の單純にして殊に其法の合理的にして、呼吸發生に就ても朱氏の振搖術に勝れるものとし且つ朱氏の法に比すれば演習及び振搖の困難なく、しかも危險なく亦偶發症なき良法たることを稱贊せり。

濱田玄達、佐伯理一郎は、普通產婆學を著述し、池田陽一は、手術的婦人科、及び助產學補遺を、獨逸文にて報告せり。

翌三十五年、濱田玄達、高山尙平、柳琢藏、木下正中、緒方正清、吾妻勝剛、佐伯理一郎、池田陽一等は、日本婦人科學會を發起し、その第一會を東京に於て開催す。又緒方正清は、中央婦人科學會雜誌を發刊し、後之を婦人科紀要と改題し、自ら監修の任に當れり。榊順次郎は、本邦婦人五百人に就て、骨盤、及び他の固有なる狀態と、分娩時間との關係を論述せし論文を公にす。木下正中、高山尙平は、始めて、子宮筋腫の腹式全剔出術を施し、良成績を得て、之を公にし、緒方正清は、ヘーガルの「カストラチオン」壹百回と、其の適應症、及び術後の狀態、並に缺落症狀等に就て之を報告せり。又樋口繁治は、子宮膣管の重複に就ててふ、獨逸文の報告をなし、緒方正清は、「ベラスツング」療法の實驗、及び此の療法に向つて有益なる二三の適應症を追加し、秋庭俊照は、梨子狀畸形、胎盤の障害、及びその病例を公にし、榊順次郎は、妊娠嘔吐症の原因に關する諸

説を擧げ、其の治療法として、刺戟療法の有效なることを公にし、

山田謙次は、婦人病論を纂述せり。

三十六年、藤浪鑑は、本邦佝僂病の病理解剖に關する諸説を叙し其の解剖、及び組織上の研究成績を公にし、本邦に於て骨軟化病の存在、及び佝僂病を骨軟化症との病理組織上に於て、全く同一本態なることを報告せり。

桂田富士郎は、妊娠瘢痕と彈力纖維との關係について、木下正中は、恥骨縫際上部の十字切開、磐瀨雄一は、稀有なる卵巣類胎兒腫について、小川愛輔、磐瀨雄一等は、脈絡膜上皮腫について、孰れも有益なる報告をなせり。

此年、東京醫科大學にては、助教授千葉稔次郎教授に進任し、楠田謙藏は、産科婦人雜誌を刊行し、中島襄吉は、産科學講義を出版したり。

翌三十七年、福岡醫科大學の設備成りて、高山尙平講師として赴任す。東京醫科大學敎授千葉稔次郎職を辭す。緒方正淸は、産科院を分設し、助産科、及び婦人科患者を區別して治療するの道を開始せり。緒方十右衞門は、シュナイデルリング斯古剌拉密涅莫爾比涅の混合麻醉について、高山尙平は、膀胱輸尿管移植法の實驗を、いづれも發表せり。又中島襄吉は、シェツフエル産科圖譜を譯出せり。

明治三十八年、第三回日本婦人科學會は機關雜誌として、日本婦人科學雜誌を發行したり。大槻滿次郎は、山極病理敎室に於て、「ジンチチユム」細胞發生論を、角田秀雄は、臺灣婦人の骨盤について、高橋辰五郎は、我邦産褥熱統計の不滿足なるを述べ、現在の統計表を以つて、歐洲の統計に比較し、獨逸の二布仙に對する本邦の三布仙は、最も疑ふべきものにて、更に詳密確實なる統計を作るときは、

倘遙に大なる布仙數の存在せるものならんと云ひて、此の際一定の制度を設けたしと主張せり。

磐瀨雄一は、卵巢類胎兒腫の顯微鏡的檢査の成績に就て、及び子宮外妊娠二十四例に就き、臨床的調査を施し、その原因、及び症候を說明し、山崎正董は、九州婦人の月經、及び不妊の關係、並に結婚年齡に就き、角田隆は、生殖器類崎形腫瘍中の上皮化生について、木下正中、北川乙次郎等は、子宮癌の宿題について、孰れも精細なる調査の結果を報告せり。又木下正中は、產婆學講本を著述したり。

木村正明は、民顯大學に在りて、五百回の分娩について、其の後產期の處置、及び結果を獨逸文にて報告せり。

明治三十九年、富山縣氷見郡、及び石川縣羽咋郡に於て、佝僂病、及び骨軟化症の發見せらるゝや、木下正中、田代義德等は、內務省より出張を命せられ、緒方正清も亦、該二縣下に到り、精密なる調査を遂げ、從來我邦には絕无と看做しゝ佝僂病、及び骨軟化症の存在を確定せり。就中、緒方正清は、該病患者二十餘人を自家の病院に收容し、精細なる研鑽を始め、化學的、病理的、或は細菌學的檢查を遂げ、該病の由來、徵候、本態、經過、豫防、並に原因、及び療法の各項下に之を論述し、之を著書、又は論文を以つて報告せり。緒方十右衞門は、妊娠脚氣の臨床的觀察を遂げ、脚氣の妊娠、及び分娩障害を獨逸文にて發表し、横田亮雄は、膀胱輸尿管移植術の實驗例を報告し、木下正中は、恥骨縫際截開述を施し、次で又耻骨側截開術一例を公にせり。蓋し本邦に於て、該術を施しゝは、氏を以つて始とす。

緒方十右衞門は、惡露の細菌的檢查、及び妊娠脚氣と胎兒脚氣とについて、木下正中は、產褥熱の統計的調查を、多田學三郎は、重症惡阻と「アッエトン」尿との關係について、樋口繁治は、膣、及び子

宮粘膜の吸收力について、高山尙平は、乾燥熱氣療法について、淵田俊治は、子宮筋腫發生學上の增補を、榎本芳二は、子宮內外冷溫器について、各その所論を報告し、斯界に益する所ありたり。東條良太郎、土肥衞は、新撰產婆學を著はし、之を版行したり。翌四十年、中原德太郎は、富山縣に發生せる佝僂病、及び骨軟化病に就て獨逸文を以て報告し、東條良太郎は、出產組合會の組織を唱へ、醫師、及び助產婦の普及を計るべき意見を公にせり。山極勝三郎、大槻滿次郎は、子宮膣部癌腫の種類、及び發生について、高山尙平は、喇叭管炎の診斷について、山崎正董は、我帝國に於ける本島、「アイヌ」、琉球、及び支那、四種族婦人月經の初發、持續、閉止に就いて、いづれも有益なる論文を公にしたり。

緒方正清は、假死したる初生兒、及び新蘇生術論と題する獨逸文を、櫻井三之助は、日本婦人と歐洲婦人との分娩持續の差異、と稱する獨逸文を、吉光寺錫は、人體胎盤の「プリン」基、及び「ヌクレイン」酸について、獨逸文を以つて論表したり。翌四十一年、木下正中は、婦人科的癌腫について詳密なる統計的報告をなし、川添正道は、「ラパロトミー」に於ける附屬器截除術の成績について、報告をなせり。

緒方正清、水口耕治は、佝僂病性骨軟化症の屍體解剖を行ひ、その骨骼について、人種學的、解剖的、及び病理組織的檢査を報告し、內藤達は、佝僂病性骨軟化病者に於ける、眼變常を報告せり。又緒方正清は、丹波篠山地方の佝僂病、及び骨軟化症の調査報告を公にし、相馬又次郎は、免疫せる母、及び小兒の「ヘモグロビン」の關係について、磐瀨雄一は、子宮外妊娠、及び卵巢纖維について、櫻井三之助は、何故に子宮筋腫は手術せざるべからざるか、緒方正清は、日本婦人生體に於ける骨盤論を、相馬又次郎は、臟器剔出後に由來する過敏症について、各獨逸文にて、その所論を發表せり。

翌四十二年、新潟縣知事は、非産婆の取締、及び助産婦養成開業を奬勵し、之を管内各警察署長に訓示し、高橋辰五郎は、地方開業の助産婦に補助費を給するの必要を論じたり。

木下正中は、ゼルハイム恥骨縫際上部帝截開術を施し、川添正道は、子宮附屬器の保存的療法を行ひ、秋元洗二は、婦人科に於ける吸引療法を施し、緒方十右衛門は、子宮、及び膣壁に於ける神經節について、大槻滿次郎は、慢性增殖性子宮體部內膜炎の種類、及び搔爬材料診斷について、各有益なる報告を爲し、或は論著を公にしたり。

緒方正清は、骨軟化病の「カストラチオン」、及び手術後患者の成績を、萬島稻雅は、佐渡に於ける佝僂病、及び骨軟化病を、森正道は、從來外科療法として、世人の注意せざりし、小腸を使用したる造膣術を創意せり。該問題については、本邦二三専門家の反對ありしも、

歐洲に於ける有力なる外科、及び婦人科醫は大に之を稱用し、斯の術式に、森氏の名を冠するに至れり。

栗原永之助は、鉗子手術について、樋口繁治は、胎盤の運動的作用、及び胎盤の化學的集成の補遺、並に胎盤醱酵素の知見、及び子宮の吸收力について、緒方十右衛門は、褥婦の赤血球と白血球の數、並に血色素含量の檢查、妊娠及び産褥と合併せる脚氣の臨床的觀察を、辻高俊は、癌腫の多發性、及び産科的手術を行ふべき頻度について、相馬又二郎は、種々なる年齡時に於ける卵巢血管の組織について、殊に、月經、及び排卵性硬變に注意すべきことを、磐瀨雄一は、子宮粘膜の毛樣性變化、及び筋腫に於ける子宮粘膜の關係について、辻高俊は、月經時及び非月經時の血壓關係を、山崎正董は、日本婦人の月經初發について、緒方正清は、骨軟化症の外科的療法を、櫻井巧は、妊婦、産婦、及び褥婦の血壓計測を、相馬又二郎は

胎尿「プレチピチン」について、及び被働的に免疫せられたる母體の乳腺より、「アンチトキシン」、及び「プレチピチンノーゲン」の排泄することについて、各その所論を獨逸文にて報告したり。又緒方十右衞門は、婦人科診斷、及び治療學を出版せり。

翌四十三年、貴家學而は、東京醫科大學婦人科「クリニック」に於けるモンブルグ虚血法の產科婦人科上に於ける實驗を、小林八十七は、狹窄骨盤七十四例の統計的報告を、磐瀨雄一は、子宮粘膜の週期性變化について、大槻滿次郎は、山極教授の下に、破瓜期に於ける子宮筋纖維の發育、並にその月經と妊娠時の狀態について、各之を報告し、樋口繁治は、臟器液體中に於ける「イオン」濃度を、山崎正董は、狹窄骨盤の分娩を、梶完治は、骨軟化症患者の卵巢病理的所見、及び子宮出血の卵巢性原因を、大森英太郎は、軟化症卵巢癌腫の臨床的、及び解剖的補遺を、緒方十右衞門、藤村は、腰髓麻痺に際し、人體脊髓の神經節細胞の組織的變化を發表せり。

明治四十四年、木下正中は、曩に濱田玄達の設置せし、助產婦講習の久しく廢絶せしを慨き、新に內務省布令に依り、助產婦講習科を新設せしめたり。貴家學而、大瀨貴明は、クルーケンベルグの腫瘍を報告し、緒方正清、辻高俊は、子宮癌腫の腹腔双合手術を紹介し、その良成績をも併せて報告せり。尙迎諧は、京都醫科大學婦人科「クリニック」に於ける婦人科手術に、モンブルグ驅血帶の應用について報告し、緒方正清は、重症子癇、及び危險に切迫せし脚氣患者に、膣式帝截開術を施せり。之本邦に於ける、該術を行ひたる始とす。次で磐瀨雄一も亦、子癇に該術を施し、良成績を擧げ、大槻滿次郎は、山極教授の教室にありて、子宮筋腫の發生に就て、興味ある病理組織的報告をなせり。

緒方正清は、開腹術に於ける「イレウス」について、其の實驗を述べ、

之が豫防として莖の所置、內臟の創傷、及び癒着剝離等に注意し、嚴重なる無菌性手術と、腹膜縫合の必要なる事とを說明せり。水口耕治は、緒方婦人科病院に於ける、腰髓麻醉百八十五回の實驗報告を公にし、山崎正董は、卵巢皮樣囊腫の原因、及びその中に存在せる毛髮の知見を、川添正道は、同腺腫性筋腫を、緒方正淸は日本產婆制度を、各獨逸文にて公にせり。

翌四十五年、內務省は、產婆指定學校規則を發布し、修業年限を滿二ヶ年とし、大學、專門醫學校、及び民間に於ける、之に適當なる敎育機關と設備の存在を認むるものには、示定規則に據り、その卒業者に開業免狀を附與することゝなせり。

木下正中は、再び佝僂病、及び骨軟化症の統計的報告をなし、又該病研究の爲、再度富山、新潟の諸縣に出張せり。

緒方正淸は、新「マルザス」論を紹介し、且つ之に對する自己の實驗を報告し、贄彌三郎は、緒方婦人科病院に於て治療せし、妊娠、分娩、及び產褥に合併せる脚氣の臨床的關係について、精密なる統計的調査を遂げ、その成績を報告し、飯島貫一は、常習性流產に於ける、ワッセルマン反應、及び「サルバルサン」の應用について、其の實驗を報告せり。朝倉文三等は、日本泌尿生殖器學會を開設せり。鈴木文雄は、緒方博士の手術せし骨軟化病のポロー帝截開術について、川添正道は、移植せられたる卵巢は、殘留せるものと同樣に發育し得るかにつき、樋口繁治は、鼷鼠の癌腫に對し、各種の胎盤、血液、胎兒皮膚の乳腺、及び腺の免疫につき、緒方十右衞門は、母體脚氣の胎兒に及ぼす影響につき、足立捨二郎は、妊婦、及び產婦の血液變化に對する疑問を、緒方正淸は、佝僂病、及び骨軟化症の本態を、及び水口耕治と共に、佝僂病性骨軟化病の臨床的、及び病理的檢査を、川添正道は、人工輸尿管閉塞の試驗的研究、及び腹式癌腫手術

の合併症たる輸尿管結石について、各獨逸文にて之を報告したり。本書叙し來るもの、前の如し。その混沌時代より支那各醫方に及び、王政維新前後洋醫方渡るや、漸次進歩を來し、今や一大長足の發展を成せるものといふも、蓋し溢美にあらざるべきか。その沿革の要、學況の略、著者の知見、未だ洽からざる事多く、或は疎に失し、精に過ぐるの憾なしとせず。之を要するに、産婦兩學科が、我邦に於ける醫學進歩と歩調を共にし、現今の域に達したるは、その源泉官學に外ならず、官學とは東京醫科大學、京都醫科大學、九州醫科大學の三者なれど、その最初なるは、東京大學となす。東京大學に於ける清水教授は、その開拓者とも云ふべく、濱田教授は、之が耕耘者にして、明治三十二年七月以降、濱田教授の下に教課を分擔せし木下正中は、三十三年四月濱田教授の辭任するや、直に之に代り、部下には中島襄吉講師、又は助教授として佐けしに、氏の辭任後は、助教授磐瀬雄一、講師相馬又二郎、橋爪哲造等、その任に當り、手術の如きも頻繁に行はれ、その室を稱して、校丁等の卵巣室と呼ぶに臻れり。或は、産科往診の制を創めて、産婆教育の輿論を喚起し、三十二年の産婆規則改正と共に、産婆養成所を改めて、産婆復習科となし、或は産婆講習科を設くる等、一に中央摸範を示したる、或は公衆衛生上に、或は死産率研究に於ける、統計報告等は政府の制度上に幾多の參考を供し、その施設上に與へたること、蓋し莫大なるべし。されば、この源泉より湧出る水は、地方に流れて産科院の設立となり、民間専門家の輩出とはなれるなりき。

抑我邦に於ける産科は、西洋醫學輸入以前に於て、既に専門醫の手に委ねられし事、本書記する所の如く、産科専門を以つて、門戸を立つるもの少なからざりしも、病院を開設して、患者を收容したるものは、維新後故岩佐純の告成堂醫院、並に櫻井郁次郎の櫻井病

院を以つて鼻祖となすべく、而して、甲は分科病院にして、乙は專門病院たり。之に次ぐは、日本赤十字社病院、東京慈惠會醫院、順天堂病院などの、分科として置かれ、增田知正、水原漸の東京産科婦人科病院、及び榊順次郎の榊病院にして、東京産科婦人科病院は、增田氏の單獨經營となり、氏の沒後濱田玄達の主宰となりて、産科婦人科濱田病院となれり。　地方には、大阪に緖方正清の緖方婦人科病院、佐賀に池田陽一の池田病院、京都に佐伯理一郎の京都産科院あり。　この他全國産科婦人科の分科を設くる官私立の病醫院は、その數實に夥しきものあり。　就中地方に於て、産科婦人科兩學科發達の爲に、著大なる影響を與へたるは、福岡縣立病院に於ける故大森池田兩博士の業蹟に外ならず。　兩氏は、銳意熱心に防腐法を應用して、開腹術を行ひ、殊に卵巢腫瘤剔出の成績を報告して、當時の視聽を聳動せしめたるは、我産婦二學科は勿論、外科學に取りて、發達史上特筆すべきものとす、

民間の産科院斯の如し、官學にても、京都帝國大學、及び九州帝國大學の增設せらるゝあり。　京都醫科大學は、明治三十二年の創立にして、その産科學婦人科學敎室は、高山尙平之を擔任し、吾妻勝剛歸朝して敎授となるや、二學科の設備、及び整頓を謀り、その成績頗る見るべきものありしに、三十九年吾妻敎授去りて、高山之に代り、斯業の發達に腐心し、婦人科患者、並に産婦收容の數激增し、又敎室の施設、手術室、分娩室、病室等全く整頓せり。

九州醫科大學は、明治三十六年の創立にして、當初は京都帝國大學の一分科たりしも、九州大學の設立と共に、その分科となれり。營造物は、福岡縣立病院を改增したるものにて、施設全備し、開腹術の多數なること他に比類なく、專ら大森、池田二博士の勵精に依れり。　創立の時、高山尙平敎授たりしが、氏の京都大學に轉ずるや、

今淵恒壽、之に代り、益々發達しつゝあり。

官民兩方面を以つて組織せし會は、關西産科婦人科學會を推すべし、こは明治二十三年、第二回日本醫學會の東京に開かるゝに際し、全國の國手雲集し、殊に二科を以つて專門とするもの、講演を試みたる事多く、此の機を以つて、二科專門の學會を組織せんとの議起りしも、終に成らざりしに、緒方正清、高山尚平、柳琢藏、河野徹志、木下正中等相謀りて、明治三十二年を以つて、遂に其の第一回を大阪に開き、翌年第二回を京都に開き、爾來每年之を開會せしに、明治三十五年日本婦人科學會起るに及び、之と合同し、每年一回總會を開き、斯道の爲に貢獻せり。

又産科婦人科二學科に關する刋行物の重なるものは、日本婦人科學會雜誌、及び婦人科紀要の右に出づる物なく、甲は會員の論著講演を蒐集し、內外の資料を抄錄し、乙は緒方正清の主宰にして、主として內外の論著を登載し、その材料豐富にして、有益の記事少なからず。この他各地方に於て發刋するものは枚擧に遑あらず。

産科婦人科の治療に於ける、歐洲の所謂廢刀手術たる、外科的執刀療法に代ふる所のレンチエン放射及びラジウム放射療法は、漸く行はれ、官學に於ける産科婦人科治療室中、東京醫科大學、及び民間病院なる、大阪緒方婦人科病院は卒先して是が設備をなし、新治療法を試みつゝあり。

終に臨み、著者は夙に、産婆の名稱を改めんことを主張せしことを謂はんとす。産婆とは文字の示すが如く、娩産をなす所の老婦なり。老婦、豈娩産すべけんや、殊に、産事の介助者たる婦人は、昔時に於てこそ、老婆を以つてしたれ。今日にては、年齒の如何を問はず、その技能に秀で、學殖に深きものは、妙齡の女子と雖、從事すべき業務なれば、既に職稱として、その稱呼の不適當なるは謂ふ

を俟たざる所にして、文字の意義よりいふも、雅馴ならざるよりいふも、將た年齡よりいふも、實に不適當の甚しきものなれば、著者は十數年以前より助產婦と改稱すべき事を主張したり。然るに、未だ內地に於ては、爲政者の認むる所とならざるも、臺灣、及び朝鮮に於ける總督府にては、勅令に、助產婦と稱するに到れり。

次に、著者の考案せる初生兒假死蘇生術の如きも、亦蘇生の字義、並に意義に於て妥當ならざるを思惟し、今や之を發啼術と改稱せんと欲す。夫れ發啼の字たる、先進古賢、既に之を唱導したり、卽ち、奧劣齋の發啼術といへる名詞なりとす。附記して、茲に言明す。

日本婦人科學史　終

日本婦人科學史人名索引

日本婦人科學史人名索引

一、此索引は日本婦人科學史中に掲げたる人名をいろは順に排列し讀者の捜索に便ならしむるものとす。

い

伊勢守貞隆　五三、一二三
伊勢貞丈　九〇
伊勢守貞陸　一二九
板坂宗慶　一六七、一六八、三七四、三七五
板坂釣閑　一六八
板橋元碩　二六四
稻生正治　三五一
石川清忠　三九〇
石井　三九一
池田陽一　三九〇、三九五、三九八、四〇〇、四〇二、四〇四、四〇六、四〇八、四二四、四二五
伊藤隼三　三九九
井神亭　三八八
伊東精一　四〇四
磐瀬雄一　四一〇、四一二、四一五、四一七、四一八、四一九、四二三
飯島貫一　四二一
岩佐純　四二三
今淵恒壽　四二六

ゐ

井澤長秀　六八
井上純郷　三四〇
猪子止戈之助　三九一、三九九
井上平造　三九九

は

原昌克　二一三、三四一、三四二、三五二
塙保已一　三三九
原昌綴　三四二
長谷川杏庵　三五四
華岡震　三五五
ハルツホルン　三八三
橋本綱常　三八六
原田元貞　三八八
長谷川泰　三九〇
ハーケ　三九六
濱田美政　三九六
濱田玄達　三九二、三九四、三九五、三九六、三九九、四〇一、四〇二、四〇七、四〇八、四〇九、四一九、四二四、四二五
林英雄　三九八
橋爪哲造　四二三

に

如意庵　一一五
西玄哲　一七九
西善三郎　一八〇
ニーマイル　三八八
贄彌三郎　四二一

ほ

ホブソン　三七八
ホフマン　三八二
ポーデロック　一七八
堀内篤藏　三九五
ボードイン　三八一
ポロー　三九一

へ

ベルツ　三八五、三九〇、四〇〇
ヘーガル　四〇二、四〇九

と

戸田旭山　一六一

富澤黃貝　二五四、二五六、二五七
トーマス　三八八
東條貝太郎　四一四
土肥衞　四一四
トレンデレンブルグ　四〇四

ち

中條帶刀　一六〇、三七三、三七四、一六三
　一六六、一六八
千葉稔次郎　四〇一、四〇六、四一〇
　四一一
直海龍　八六
チュールレ、ブランド　三九五

り

李東垣　一〇七、三七二
リスター　三八六、三八二、三八一

ぬ

沼野元章　二五四
沼野村章　二五六、二五七

る

ルンゲ　四〇六

お

緒方正清　九五、三一二、三九六、三九七
　三九八、三九九、四〇〇、四〇一、四〇二
　四〇三、四〇四、四〇五、四〇六、四〇七
　四〇八、四〇九、四一一、四一二、四一三
　四一四、四一五、四一六、四一七、四一九
　四二〇、四二一、四二四、四二六、四二七
　四二八
岡本玄廸　一七八
岡本延昌　一九〇
奧道逸　一九五、二一三、三四二、三四三
　三五二、三五六
緒方惟勝　二一三、三四四、三五二
大牧周西　三五三、二六三
奧澤軒中　二六四、三五三
奧之紀　三四三
奧劣齋　一九四、三四四、三五二、三六三
　四二八、三七五
小篠昌榮　三五四
大槻玄澤　三五七
大西惟貞　三五六
荻正鄉　三五六
緒方禎甫　三八八
大森治豐　三九〇、三九五、三九八、三九九
　四〇〇、四二四、四二五
緒方收次郎　四〇〇
尾澤圭一　四〇一
小川勝陳　四〇七
大澤岳太郎　四〇七
小川愛輔　四一〇
緒方十右衞門　四一一、四一三、四一六
　四一七、四一八、四二一
大槻滿次郎　四一一、四一四、四一六
　四一八、四一九
大森榮太郎　四一八
大瀨貫明　四一九
尾澤守一　四〇一
小野利敎　六八

わ

和氣相秀　九八
和氣相重　九九
和氣相榮　九九
和氣定康　一〇〇
和氣定親　一〇〇
和氣定成　一〇五
和氣有成　一〇六
和氣仲景　一〇七
和氣弘景　一〇七
和氣定清　一〇七
和氣爲成　一〇七
和氣常成　一〇六、一〇九
渡邊佑貞　二六四
ワツセルマン　四二一
渡邊越　三八八

か

貝原益軒　五六
糟尾爲春　一六六、一六七
賀川玄悅　九二、一七一、一七二、一七四
　一七七、一七八、一八〇、一八一、一八二
　一七六、一九〇、一九一、二一二、二一三
　二五六、二五七、二五八、二六一、二六二
　二八七、三四〇、三四一、三四三、三四五
　三四六、三四九、三五一、三五六、三五七
　三七四、三九七
梶原性全　一〇七、三七二

賀川滿定　一〇九、一九二、一九三、二一九
　三四四、三五二、三五七、三七五、三七六
片倉元周　一八一、二五七、二一三、三四〇
　三四一、三四五、三五二、三五七、三六一
賀川玄廸　一八一、一九〇、一九二、二一二
賀川子修　一九〇
賀川子全　一九〇
賀川滿鄉　一九一、一九二、二一一、二一九
　二三〇、二五一
賀川滿崇　一九四、一九五、二一一、二一八
　二一九、二二〇、三五九、三七五
賀川秀哲　一九五、二一一
賀川滿載　一九五、一九六、一九七、二一一
　二一九、三五九、三六一、三七五
賀川玄吾　三七八、二一一、三七四
賀川秀益　二一二
賀川滿陰　二一二
賀川眞吾　二一二
賀川玄泰　一九〇
賀川有章　二一一
賀川玄仙　二五六
鹿島好成　二六四
賀川修齋　三二四
賀川蘭齋　三四四、三五三、三六三
賀川惇德　九五、二一一、三五三
金子杏庵　三五五
加藤壽德　三五六
桂川甫周　三五六、三七五
カール、カスパル　三六八
片倉鶴陵　三七五
片倉玄簡　三四〇
片倉東翁　三四一
金森辰次郎　四〇六
桂田富士郎　四一一
川添正道　四一五、四一六、四二〇、四二一
梶完次　四一八
カールス　三七七
香月牛山　三五一

よ

吉田原桂　一〇九
吉田長因　一一四
吉益半笑齋　一六五、一六六、三七三
吉田自庵　一七九
吉田自休　一八〇
吉雄幸作　一八〇
吉益南涯　一九〇
吉田貝珉　二六四
吉見稗泉　二六四
吉田宗桂　一〇九、一一四、三七二
吉田長叔　三七七
吉田顯三　三九〇、三九五、三九七、三九八
　三九九
横田亮雄　四一三

た

竹岡有仙　六四
丹波實康　九八
丹波賴康　九九
丹波基康　九九
丹波經基　一〇〇
丹波康賴　一〇一、三七二
丹波貝基　一〇五
丹波定明　一〇五
丹波賴幸　一〇六
丹波賴兼　一〇六
丹波基定　一〇六
丹波利康　一〇六
丹波長典　一〇七
丹波長康　一〇七
丹波長宜　一〇六
丹波貝康　一〇七
丹波雅康　一〇八
竹田昌慶　一〇八
鷹取甚右衞門秀次　一一四
立野龍貞　二五九、二六三、三二四、三四五
　三五三、三六三、三六五、三六七
多紀元德　二四〇
多紀元簡　三四〇
田代三喜　一〇九、三七二
高貝齋　三六九、三八七
高橋正純　三八三、三八七
武部隆太郎　三九〇、三九一
高阪駒三郎　三九八
高山倚平　三九九、四〇二、四〇四、四〇五
　四〇九、四一一、四一四、四二五、四〇六
　四二六
高橋辰五郎　四〇三、四〇四、四一一
　四一六
田代義德　四一二
多田學三郎　四一三
男周逢　二六四

高田與清　七一
タルノフスカヂヤ　一四八

れ

レオポルド　四〇四、四〇六
レナーク　一七七
レアルヅス　一七六
レントゲン　四二七
レーライン　四〇七

そ

ソーリンゲン　一八一

つ

通仙院瑞策　一六八
辻高俊　四〇六、四一七、四一九
角田秀雄　四一一
角田隆　四一三
ツワイフェル　四〇四、四〇六

ね

根本伯明　三五五

な

半井明英　一一四
檜林豊重　一七九
南條宗鑑　一一四、三五〇
中岡一得　三五六
中川惇庵　三五六
永田徳本　一一三、三七三
長尾精一　三九四
長瀬時衛　四〇二
中島嚢吉　四〇六、四一〇、四一一、四二三
中原徳太郎　四一四
内藤達　四一五
半井驢庵　三七三
半井宗瑞　一一四
半井長因　一一四
半井秀次　一一四

ら

ランゲハンス　三九八

む

村山自伯　一八〇

棟方隆　三九四

う

宇津木益夫　三五七
ウイルリヤム　一七七
ウエルニッヒ　三八三、三八五、三八六、
四〇〇
浦島堅吉　四〇一
浦邊潤堂　三五七
ウインケル　三九三、三九八

の

乗付三喜齋　一六六
乗付氏　一六五、一六六、三七三、三七四
野呂元丈　一八〇
乗付一州齋　一六六

く

栗崎道有　一八〇
栗崎道喜　一八〇
桑原惟親　二一三、三四四、三五三
呉秀三　二五五、四〇三
熊谷幸之輔　三九五、三九九
熊谷省三　三九五
楠田謙藏　四〇七、四一〇
栗原榮之助　四一七
黒川道祐　一一〇

や

山邊篤雅　二一三、三四三
山脇東門　三四一、三四二
山脇東洋　三四四
山邊文伯　三五二、三五九
山田久尾　三五五
矢田部卿雲　二六五、三七七
山崎玄東　三七八
山崎元脩　三八六、三八七
柳琢藏　三九七、三九九、四〇一、四〇四、
四二六、四〇九
山田謙次　三九九、四一〇
山極勝三郎　四〇四、四一一、四一四、
四一八、四一九
山崎正董　四一一、四一四、四一七、四一八、
四二〇
ヤリイス　一七九
山崎道作　三三九

ま

曲直瀬道三　一〇九、一一三、三三八、
三五三、三七二、三七三
前野蘭化　一八〇
馬屋原玄説　二一三、三四四、三五三
前野良澤　三七五、三五六
マンスフェルド　三八七、三九二
増田知正　四〇三、四二四
滿島稲雅　四一六
玄壽齋　一五七、一五八

け

ケリコリ　一七九

ふ

ブュッシャテレー　一四九
富士谷成基　二一三、三四四、三五三、
三五四
藤崎東陽　三五五
フメルリー、パルフィン　三五九
船曳德夫　三七八
フライフェル　三八六
フォレニーマイエル　三八八
富士川游　四〇三
二川鋭男　四〇四
淵田俊治　四一四
藤村元張　四一八
ブルールス　三八七
藤波鑑　四一〇
フリッチ　四〇七
フェルズース　一七三
船曳卓堂　三八八
船曳子錦　三七八
福井丹波守　一九二
フレンキ　四〇七

こ

河野毗通　六二
惟宗秀俊　九九
近藤直義　三二四、三五六、三六七
近藤賢直　三三七
兒島恭齋　三五五
小林義直　三八三
河本重次郎　三九八
小金井良精　四〇七
小林八十七　四一八
河野徹志　四〇四、四二六
後藤艮山　九二
後藤仲介　九二
後藤椿庵　九三
コルムプス　一七六

え

遠藤外三郎　三九八
榎本芳二　四一四

て

手塚良庵　二六四
デーニック　三八五

あ

安藝宗定　一〇九
安藝貞守　一一二
安藝守家　一一二
安藝守宜　一一二
安藝守貞　一〇九、一一〇、一一二、三七二
安藝貞德　一一二
安藝貞家　一一二
安藝貞像　一一三
安藝貞種　一一三
安藝貞俊　一一三
安藝貞秀　一一三
安藝貞辰　一一三
阿佐井宗瑞　一一四
赤井悪右衛門　一六五、一六六
青木昆陽　一八〇
安藝道受　三三八
安藝貞知　三三八
安藝貞隆　三三八
安藝貞一　三三八
安藝貞熈　三三八
安藝貞陳　三三九
安藝貞綱　三三九
安藝貞方　三三九
淺田惟常　三五五
アダム、エリアス　三六八
足立無涯　三七六、三七七
青地林宗　二六五、三七七
安藤桂洲　三七八
足立健三郎　三九一、三九六、三九九、
四〇四

淺山義六　三九四
吾妻慶治　四〇一
アルメーダ　三九六
アイチオス　一七九
アリストートル　一七三
相磯慥　一七六
新井古芳　四〇一
吾妻勝剛　四〇六
秋元洗二　四〇九、四二五
朝倉文三　四一六
足立捨次郎　四二一
秋庭俊照　四二一
　　　　　四〇九

さ

草蹊道人　五七
坂土佛　一〇九、三七二
坂淨秀　一〇九、三七二
佐伯理一郎　一七八、一八〇、二一三
　三九五、四〇一、四〇四、四〇八、四〇九
　四二四
佐々井玄敬　二一三、三四〇、三五二
坂本宗文　二一三、三四四、三五〇
　三五三
櫻井郁二郎　三八六、三八八、三九〇
　三九四、四〇一、四二三、三九一
榊順次郎　三九一、四〇六、四〇九、四二四
佐藤進　三九九
佐藤恒久　三九九、四〇二
佐藤勤也　三九八、四〇七、四〇八
櫻井三之助　四一四、四一五
相馬又次郎　四一五、四一七、四二三
櫻井巧　四一七
ザロモン　三七七
サラマン　二六五

き

北村金吾　三七八
北川乙次郎　三九九、四一二
木下正中　四〇四、四〇五、四〇六、四〇七
　四〇八、四〇九、四一〇、四一二、四一三
　四一五、四一六、四一九、四二〇、四二三
　四二六
木村正明　四一二
吉光寺錫　四一五
貴家學而　四一八、四一九

み

ミード　三八三
水越頁輔　二六四
水原義博　二六四、二六六
水原三折　三二四、三三七、三五四、三六七
　三七五
三輪順藏　三七六、三八三、三九七
ミユルレル　三八二、四〇〇
三宅秀　三八二、三八三、三九七
三宅速　四〇〇
水原漸　四〇六、四二四
水口耕治　四一五、四二〇、四二一
皆川淇園　一七八
三宅意安　一一四
箕作阮甫　三七七

し

蜀山人　六三
柴原隆益　二五六
澁谷元龍　二六四、二六九
島田泰夫　三三七、三五六
澁江太亮　三五五
シーボルド　二六八、三七六、三八三
　三九七
シユルツエ　三八二、三八六、三九六
　四〇八
清水郁太郎　三八九、三九〇、三九二
　四〇〇、四〇一、四一三、四二三
下平用彩　三九六、四〇六
柴田耕一　三九七、四〇二、四〇七
シツフェル　四一一
シユレーデル　四〇六
シユネルハート　四〇二
シンメルブツシユ　四〇〇
朱丹溪　一〇九、三七二

ゑ

エルメレンス　三八三

ひ

蛭田克明　二五三、二五四、二五五、二五六
　三五一
平野重誠　三五五、三六六
人浦部潤堂　三五七
ヒポクラテス　一七三
一橋宗晴　三五七
一橋宗賢　三五七
一橋宗喬　三五七
廣瀬元周　三七九
平出謙吉　四〇七
樋口繁治　四〇九、四一三、四一七、四一八
　四二一
ピンクス　四〇六

も

森崎保祐　二六二、二六四、三五三
森崎支道　二六四
森崎佐好　二六四
森崎佑整　二六四
物部誠一郎　三八六
森永友積　四一六
森正道　四一六
モンブルグ　四一八、四一九
モリトール　一四八

せ

ゼールハイム　四一六

す

杉田玄白　一八〇、三六三、三五六
鈴木支策　二六四
鈴木佑調　二六四
鈴木長庵　三五六
杉田支端　三八三
スウイン　三八七
スクリツパ　三八八
菅之芳　三九四、三九六
鈴木文雄　四二一
スペンサー、ウユルス　三八一
スメルリー　一七七

日本婦人科學史跋

古語曰國史者國家之生命國
而無史則非邦也此言固無差
醫史之難亦猶他史修史標語
國家之盛衰於今科史亦著之意
於吾爲荀擬其人實力之足事
理居明如語也而國覽叢亂篇乃待

學識大才明於理者而後著書
始能覺不難乎頗近醫學
大進婦人科學最甚盛矣本邦古
來雖不乏於產科之書以余所視
之如賀其説詳於井桂諸氏
可見而已之論也松山佐伯博
士以婦人科醫名東京乎嘗著學婦

所譯著高一冊以著其新婦人
科學史記第一于神代記歷
世醫學沿革及其大要而至
風儀典禮之細獻據習俗之術
和漢詳明之處無不遺漏
實可勝於名醫術書冊多
不啻一百冊之傳之書也監寫械

悉具之角圖繪精緻之意並
皆得其論而光明犹出暗室觀
日月蓋雖非専門家者又能
可以解至專家者之謂無更所
与言術也昔堀川主悦為産
科醫案計人為之為一冊之
宗使博士會見之乃欲以其出

不可擬横放論也吁如此書實
論者家之人而不書止讀論
婦人并濟斯民也若是以為跋

大正三年十一月

棣萼小野利教書

96
2
104

（日本婦人科學史）

正價 金貳円八拾五錢

大正三年七月一日印刷
大正三年七月十一日發行

版權所有

著作者　大阪市東區宰相山町　緒方正

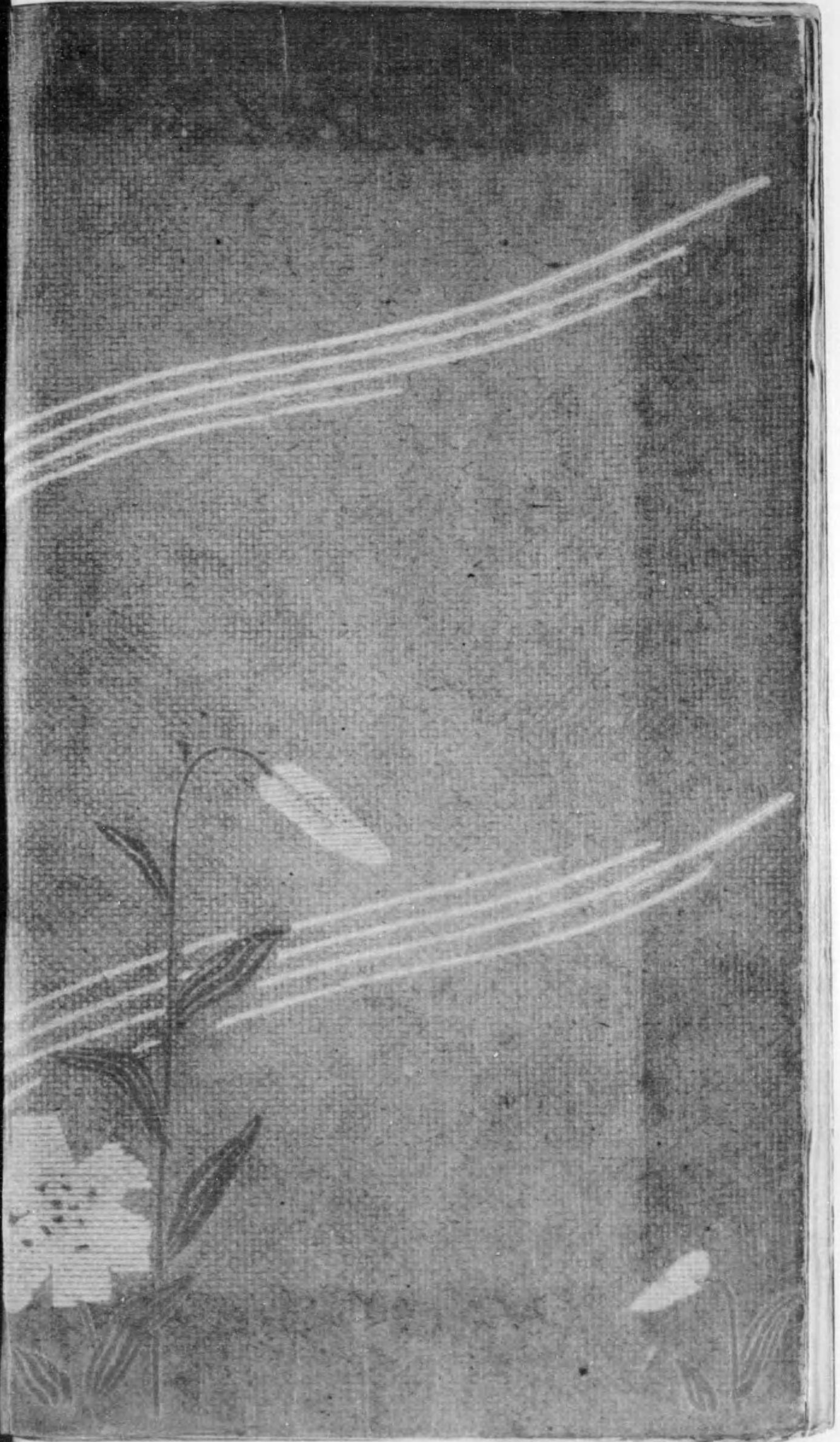
發行者　東京市日本橋區通三丁目十四、五番地　丸善株式會社
代表者　專務取締役　小柳津要人

印刷者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　野村宗十郎

印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所

發行所　東京市日本橋區通三丁目十四、五番地　丸善株式會社
大阪市東區博勞町四丁目　丸善株式會社大阪支店
京都市三條通麩屋町西へ入　丸善株式會社京都支店

56
104



終